

非検疫有害動植物追加検討結果の概要

PRA結果(横浜植物防疫所)に基づき植物防疫課が整理(平成25年5月)

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生の系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
1	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Acanthoplusia agnata</i>	ミツモンキンウワバ	東アジア(日本を含む)、ロシア(アムール川)	キンギョソウ、サツマイモ、チューリップ、ニンジン、プリムラ、ワタ、アブラナ科植物、キク科植物、マメ科植物	成虫は前翅長17mm内外、灰褐色、前翅中央部に二つの小白斑。終齢幼虫は体長30-35mm、淡緑色から濃緑色まで変異あり。頭は小さく、体前方は比較的細く、後方ほど太まり、背面が著しく膨れる。幼虫はシャクトリムシのように歩き、老熟するとわずかの糸で葉を綴り薄い繭中で蛹化する。年間発生回数は3-4回とみられ、越冬態は終齢幼虫または蛹と推定されている。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫の加害範囲はやや広く、ニンジンでは9-11月に大発生することがある。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物
2	有害動物	節足動物	ダニ目	フシダニ科	<i>Aceria tulipae</i>	チューリップサビダニ	[アジア]日本、インド、インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム [中東]トルコ [欧州]イタリア、オランダ、グルジア、スペイン、デンマーク、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ポーランド、モルドバ、ロシア [アフリカ]エジプト、タンザニア、南アフリカ共和国 [北米]アメリカ合衆国 [中南米]キューバ、チリ、ブラジル、ベネズエラ [大洋州]オーストラリア、ニュージーランド、フィジー	イタリアンライグラス、オーニソガラム、オーチャードグラス、チモシー、チューリップ、 <i>Phleum phleoides</i> (イネ科フレウム属)、ネギ属	極めて微小で雌成虫は体長0.25mm内外のウジムシ型で淡黄色。脚は2対で前肢にある。雄成虫は雌よりやや小型であるほかは形態的に類似する。チューリップでの寄生部位は花弁内側基部、球根先端部・基部であり、球根の生長とともに茎葉に寄生。	—	ア 日本未発生 garlic mosaic virus等のウイルスを媒介することが示唆されている。 イ 日本既発生 不明	無	チューリップにおいて寄生を受けた球根は紫や茶褐色に変色し、やがてその部分が乾燥してくる。葉は湾曲して白い条斑が走る。	登録農業あり：チューリップ及びニンニクのチューリップサビダニ	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生のウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 73 94 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
3	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Agrotis segetum</i>	カブラヤガ	アジア(日本を含む)、中東、欧州、アフリカ	広食性	成虫は前翅長16~20mm。色調及び斑紋ともに個体変異がある。老熟幼虫の体長は約40mm。幼虫の3齢後期になると土中に潜る個体が現れ、5~6齢では土中に潜っていて夜活動する。生葉への産卵はまるで古葉や枯葉に多く、全体の90%以上が地表3cm以下の場所に産卵される。東北以北では年2世代、関東では3世代、九州・四国では一部が4世代発生する。幼虫が土中で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	孵化幼虫は、植物の生長点付近又は下葉に定着して摂食するが、5~6齢になると夜間に地際部を摂食し、切断することがある。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 60	非検疫有害動植物
4	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナジラミ科	<i>Aleurocanthus spiniferus</i>	ミカントゲコナジラミ	アジア(日本を含む)、アフリカ東部、オーストラリア、ハワイ	カンキツ類、カキ、クスノキ、クチナン、チャ、ビワ、ブドウ、ユズリハ、ツツジ属植物、ナシ属植物、バラ属植物、ハンレイシ属植物	雌成虫の体長は約1.3mm、雄はやや小さい。体色は橙黄色で白粉を帯び、前翅は紫褐色で白紋を有する。孵化幼虫は淡黄色で定着すると黒色になる。3齢を経て蛹化。年4回発生。3齢幼虫や蛹で越冬。1雌あたりの産卵数は35~100卵以上。成虫が風に乗りて分布を拡大する。単為生殖で雄を生じる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	発生密度が高いと成・幼虫の吸汁により、葉が内側に巻く。また分泌される甘露にすす病が発生する。	登録農業がある。天敵導入は有効である。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物
5	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナジラミ科	<i>Aleurolobus marlatti</i>	マールATTコナジラミ	日本、中国、台湾、東南アジア、インド	カンキツ類、クワ、コウソウ、ニシキギ、マサキ、ツツジ属植物	雌成虫は体長約1.2mm。卵は楕円形、長さ約0.2mm。繭殻は楕円形で光沢のある黒色で周囲に白色ロウ物質を分泌する。1、2齢幼虫態で越冬。年3回発生。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成・幼虫が枝・葉部を吸汁する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動植物
6	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Aonidiella orientalis</i>	オスベッキーマルカイガラムシ	日本、世界の熱帯~亜熱帯	広食性	雌成虫の介殻は長さ1.5~2.5mm、ほぼ円形。淡黄褐色~灰白色。雄の介殻は雌に似るが小形で楕円形。年に複数回発生し、卵は雌の介殻下に産下される。羽化幼虫は介殻から脱出後、短時間のうちに寄主に定着し、雌幼虫は2齢幼虫を経て成虫。雄成虫は有翅で口器を欠く。年間を通じて幼虫~成虫まで各発育段階のものがみられる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	枝、幹、葉面、果実等の地上部のすべてに寄生し、成・幼虫が吸汁する。時に多発して枯死枝を生じて樹勢を低下させ植物体の枯死を招く。また排泄物によりすす病を誘発し果実の品質を損ねることがある。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	34 43 60	非検疫有害動植物
7	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Brachycaudus helichrysi</i>	ムギワラギクオマルアブラムシ	[アジア]日本、インド、北朝鮮、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国 [中東]イエメン、イラン、シリア、トルコ、パキスタン、レバノン [欧州]イタリア、英国、オランダ、ギリシャ、クロアチア、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、セルビア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国、モンテネグロ、ルーマニア、クロアチア、セルビア、ロシア [アフリカ]エジプト、リビア [北米]アメリカ合衆国、カナダ [中南米]アルゼンチン、チリ、ベネズエラ、キューバ [大洋州]オーストラリア、ニュージーランド、トンガ	ナシ類、アキノキリンソウ、アンズ、ウメ、キク、キンセンカ、スモモ、ネクタリン、ヒメジヤオン、ベニバナボロギク、モモ、ヨメナヤグルマソウ	無翅胎成虫は楕円形で大きさ1.6x0.83mm、レモン色。有翅胎成虫は大きさ1.7x0.78mm、頭部、胸部は黒色、腹部は青白色。卵態で越冬し、翌春寄主植物の発芽と同時に孵化して、幹母は新葉に寄生する。成・幼虫が葉や花に寄生し加害する。	—	ア 日本未発生 非永続伝搬: Plum pox virus (種としては日本既発生であるが、公的防除の対象となっており、また、日本未発生のstrainが存在する。)、 Cineraria mosaic virus イ 日本既発生 Beet western yellows virus、Cucumber mosaic virus、Dahlia mosaic virus、Papaya ringspot (type P & W) virus、Potato virus V、Potato virus Y	無	寄生を受けた葉は横に著しく巻縮し、はなはだしいときには1樹の新葉全体が巻縮することもある。	登録農業あり：果樹類、花き類、観葉植物等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生のウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 75 94 95 99 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
8	有害動物	節足動物	ダニ目	ヒメハダニ科	<i>Brevipalpus californicus</i>	オンシツヒメハダニ	[アジア]日本、インド、スリランカ、タイ、ネパール、フィリピン、マレーシア [中東]イスラエル [欧州]イタリア、キプロス、ギリシャ、グルジア、タジキスタン、ポルトガル、ロシア [アフリカ]アルジェリア、アンゴラ、エジプト、コンゴ共和国、ジンバブエ、セネガル、南アフリカ共和国、モザンビーク、モーリタニア、リビア、レユニオン [北米]アメリカ合衆国 [中南米]ガイアナ、キューバ、コスタリカ、ブラジル、ホンジュラス、メキシコ [大洋州]オーストラリア、グアム、ニュージーランド、バブアニューギニア	カンキツ類、アリタソウ、インゲンマメ、オクラ、カボチャ、カルダモン、グアバ、コチョウラン、サツマイモ、シンビジウム、チャ、ツルナ、デンドロビウム、バナナ、パパイヤ、フィドルウッド、フジマメ、ブドウ、 <i>Pithecellobium avaremotemo</i> (ネムノキ科)、キダチデンセイ、トバラ属、サンショウモドキ、ツツジ属、ナス属、ハリエンジュ属	雌成虫は体長0.24mm、体幅0.16mmの卵形で、中央部分に黒色模様のある赤色をしている。カンキツ生果実を用いた室内実験では、年間11世代がみられ、雌成虫の態で越冬した。雄成虫はほとんどみられないことから、単為生殖すると考えられる。Orchid fleck rhabdovirus及びCitrus leprosis virusが本種若虫及び成虫により永続的に媒介される。	—	ア 日本未発生 永続伝搬: Citrus leprosis virus C イ 日本既発生 Orchid fleck virus	無	本種はカンキツ類の果実の品質、量とサイズに影響を及ぼす。摂食により、オレンジ等の果皮にくぼみ、傷、亀裂が生じ、品質を損なう。	登録農業あり：チャ、果樹類、野菜等のダニ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生のウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	70 72 73 91 95 96 100 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
9	有害動物	節足動物	ダニ目	ハダニ科	<i>Bryobia praetiosa</i>	クローバーピラハダニ	世界各地(日本を含む)	アスター、アヤメ、イチゴ、キャベツ、キュウリ産雌単為生殖が誘導されるため雄は存在しない。卵態で越冬し、春先早くから活動を始めるが、5～6月には夏眠卵を産下する。脱皮や産卵は、土壌等の高温の場所を選んで行う。	体長790～930μm。体内共生微生物により産雌単為生殖が誘導されるため雄は存在しない。卵態で越冬し、春先早くから活動を始めるが、5～6月には夏眠卵を産下する。脱皮や産卵は、土壌等の高温の場所を選んで行う。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	しばしば外壁を伝って家屋内に侵入するため、衛生害虫としても重要である。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 9 11 34 42 43	非検疫有害動物
10	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Cavariella aegopodii</i>	ニンジンフタオアブラムシ	[アジア]日本、インド、中華人民共和国 [中東]イスラエル、レバノン [欧州]イタリア、英国、オランダ、スウェーデン、スペイン、ハンガリー、ポーランド、フランス [北米]アメリカ合衆国、カナダ	ポプラ、ヤナギ、ニンジン・ミツバ・セロリ等ゼリ科植物	幼虫は卵態越冬した個体が春から夏によく繁殖し、有翅胎生雌虫が中間寄主植物に移住する。ニンジンでは芯葉に寄生し、関東地方ではここで胎生雌虫とその幼虫で越冬する個体がある。	—	ア 日本未発生 非永続伝搬: Parsnip mosaic virus, Carrot thin leaf virus, Red clover vein mosaic virus 半永続伝搬: Heracleum latent virus, Parsnip yellow fleck virus, Anthriscus yellows virus 永続伝搬: Carrot mottle virus イ 日本既発生 Beet mosaic virus, Carrot red leaf virus, Cauliflower mosaic virus, Celery	無	ニンジンの害虫として知られているが、セロリにも寄生して吸汁することがある。主寄主植物はヤナギ類で、ここで生活史は不明な点が多い。北海道、本州および汎世界的に分布する。	登録農業あり 樹木類、野菜類等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)」とされる。(別途PRA報告書参照)	72 75 80 87 94 95 99 102	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
11	有害動物	節足動物	カメムシ目	カタカイガラムシ科	<i>Ceroplastes ceriferus</i>	ツノロウムシ	日本、中国、台湾、東南アジア、インド、スリランカ、イタリア、ウガンダ、タンザニア、マラウイ、アメリカ合衆国、メキシコ、ジャマイカ、パナマ、アメリカ領バージン諸島、フェルトリコ、チリ、ブラジル、オーストラリア、グアム、クック、トンガ、ニュージーランド、バプアニューギニア、メラネシア	広食性	雌成虫の虫体は水分を含んだ白色粘土状の口吻物質で厚く被われる。口吻物質は初め背面に三角状をなして突出するが、成熟すると半円状を呈し6～8mm、時に1cmに達する。まれにピンク色を帯びる。年1回発生。成熟した雌成虫態で越冬し、5月中下旬に淡赤紫～赤紫の卵を1,500～1,800個産む。孵化幼虫は主に当年枝や前年枝等の若い枝に定着する。幼虫は2齢までは移動するが、3齢以降はほぼ固着する。晩秋までに十分成長して越冬する。日本では雄はみられず、単為生殖するものと思われる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	枝に寄生する。生育の阻害及び早期落葉を起こし、排泄物によりすす病を誘発する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動物
12	有害動物	節足動物	カメムシ目	カタカイガラムシ科	<i>Ceroplastes floridensis</i>	フロリダロウムシ	東アジア(日本を含む)、インドネシア、パキスタン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、南アジア、中東、欧州(地中海沿岸)、グルジア、エジプト、アフリカ(インド洋沿岸)、アメリカ合衆国、バミューダ諸島、中米、南米北部、オーストラリア、ハワイ、ミクロネシア	広食性	雌成虫の虫体はやや水気を含んだ比較的に固い白色粘土状の口吻物質で厚く覆われ、成長すると大きさは2～3mmとなる。単為生殖を行い、おそらく年に1～2世代を繰り返す。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	多発するとすす病を誘発して被害を生じることが多いが、日本では一般に個体数は少なく、多発することはほとんどない。多くの樹木類を加害し、国外ではカンキツ害虫として知られている。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 23 43 60	非検疫有害動物
13	有害動物	節足動物	カメムシ目	カタカイガラムシ科	<i>Ceroplastes rubens</i>	ルビーロウムシ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、インド、スリランカ、モルディブ、エチオピア、ケニア、スーダン、セーシェル、タンザニア、南アフリカ共和国、アメリカ合衆国、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、フェルトリコ、コロンビア、オーストラリア、バプアニューギニア、ハワイ諸島、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア	広食性	雌成虫はアズキ色のやや水気を含んだ比較的に固い口吻物質で厚く覆われ、成長すると大きさは3～4mmに達する。背面は丸く半球状。1、2齢幼虫時は口吻物質が白色半透明で突起状。主に葉に寄生するが、枝や果実にもつく。雄幼虫は有翅で稀に出現する。通常は単為生殖により繁殖すると考えられる。年1回発生。雌成虫態で越冬し、翌年、淡褐色の卵を約800個産む。孵化幼虫は3齢を経過して成虫になり、晩秋までに十分成長して越冬する。孵化幼虫は主に当年枝の新葉に定着してほとんど移動しない。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	枝及び葉に寄生する。生育の阻害及び早期落葉を起こし、排泄物によりすす病を誘発する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動物
14	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Chaetanaphothrips orchidii</i>	ランノビアアザミウマ	日本、台湾、インド、インドネシア、スリランカ、ネパール、マレーシア、イタリア、ポーランド、サントメ・プリンシペ、モーリシャス、アメリカ合衆国、中南米、オーストラリア、トンガ、ハワイ	シクラメン、ジュズダマ、トウモロコシ、レイシ(ライチ)、アジアナム属植物、アルターナンセラ属植物、アンズリウム属植物、イレシネ属植物、エビフィルム属植物、オランダゼリ属植物、カエデ属植物、カンキツ属植物、キク属植物、コンショウ属植物、サツマイモ属植物、スズメノヒエ属植物、タコトウダイ属植物、トケイソウ属植物、ネギ属植物、バショウ属植物、ヒユ属植物、ブーゲンビレア属植物、ペゴニア属植物、ミツバ属植物、ラン科植物	雌成虫は体長0.8～1.0mmで、雄の存在は知られていない。単為生殖を行い、1雌あたり80～100個の卵を生み年間を通じて発生する。表皮下の組織内に産卵し、葉、花、茎に幼虫及び成虫が生息し、蛹は植物残渣や土壌中にみられる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	ラン類の温室栽培での発生が知られており、花や葉に白糸、褐変または傷を生じ、生育阻害も報告されている。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動物
15	有害動物	節足動物	ハエ目	ハモグリバエ科	<i>Chromatomyia horticola</i>	ナモグリバエ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、イスラエル、インド、トルコ、ネパール、パキスタン、モンゴル、ヨルダン、欧州、アフリカ中央部、エジプト、エリトリア、カーボヴェルデ、ガンビア、ジンバブエ、セネガル、マダガスカル、南アフリカ、モロッコ、リビア	広食性	成虫の体長は1.7～2.5mm。幼虫は最大3mm程度で、潜孔の中で蛹化する。一般には蛹越冬であるが、暖地では幼虫が发育を続け、施設内では世代を繰り返す。野外では北日本で年3～4回、暖地で4～5回。卵は葉の縁は葉先近くの葉肉内に産み付けられる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉に幼虫が潜孔し、葉肉を摂食する。雌成虫は葉の表面や、裏面を産卵管で傷つけ、滲出する汁をなめる。この食痕は円形の小さな孔として点々と残る。	登録農業がある。 物理的防除法(黄色粘着フィルム、防虫ネット、近紫外線カットフィルム、蒸しこみ・太陽熱等の利用)が有効とされている。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 34 43 53 56 60	非検疫有害動物
16	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Chrysodeixis acuta</i>	ホソバネキンウワバ	アジア(日本を含む)、イエメン、アフリカ、欧州、オーストラリア、フィジー	カンナ、キャベツ、コボウ、ダイズ、タバコ、チョウセンアサガオ、トマト、バナナ	前翅長14～18mm。日本では、おおむね8～10月に捕獲される。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫は葉を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	16 23 34 43 44 47	非検疫有害動物
17	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Cinara piniformosana</i>	マツオオアブラムシ	日本、朝鮮半島、台湾	マツ属植物	体は大形。無翅胎生雌虫は汚褐色、白色口吻物質でおおわれる。有翅胎生雌虫は脚が極めて長い。年間を通してマツで生活し、単性生殖によって増殖する。越冬は主に卵で行われる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	新葉、新梢の伸長を阻害し、排泄物によりすす病を誘発する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動物
18	有害動物	節足動物	カメムシ目	カタカイガラムシ科	<i>Coccus hesperidum</i>	ヒラタカタカイガラムシ	汎世界的	広食性	雌成虫は体長3～4mm、楕円～広楕円形で、成熟すると背面はやや隆起して硬皮し、淡褐～黄褐色となり、小黑点で斑紋を現す。関東地方では年に1～2世代、おもに成虫で越冬し、暖地では年に4～5世代をくり返して、ほぼ年間を通して幼虫から成虫までの各发育段階のものがみられる。日本では雄は見られず、単為生殖を行い、卵は産下直後に孵化し、卵胎生に近い。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	広葉樹だけでなく、針葉樹や草本植物を含め雑多な植物を吸汁加害する。一般に局所的発生で、多発しても枯死するようなことはなく、発生が園地全体に及ぶことはまれであるが、すす病を誘発し、果実の品質低下や他のカイガラムシの発生を助長することがある。葉面や緑枝に寄生し、時には木化した部位に寄生することもある。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動物

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・パイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
19	有害動物	節足動物	カメムシ目	カタカイガラムシ科	<i>Coccus viridis</i>	ミドリカタカイガラムシ	日本、台湾、東南アジア、南アジア、ポルトガル、アフリカ、アメリカ合衆国、バミューダ諸島、中南米、オーストラリア、パプアニューギニア、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア	カカオ、キャッサバ、クチナシ、セイヨウキョウウチクトウ、チャ、チュウインガムノキ、パンジロウ、ブルブラータ、ブルメリア、マンゴウ、カンキツ属植物、キク属植物、コーヒーノキ属植物、サンタンカ属植物、パンノキ属植物	雌成虫は楕円形、体長3mm内外、淡黄～黄緑色、背面はへん平～わずかに隆起。幼虫、雌成虫が葉面、緑枝に寄生する。年4～5世代。年間を通じて幼虫から成虫まで各態がみられる。雄はみられず、単為生殖で繁殖し、卵は産下直後に孵化する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	植物を吸汁し、排泄物によりすす病を誘発する	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物
20	有害動物	節足動物	チョウ目	ハマキガ科	<i>Cryptophlebia ombrodelta</i>	アシブトヒメハマキ	日本、台湾、中国、香港、東南アジア、南アジア、オーストラリア、パプアニューギニア、ソロモン諸島、バヌアツ、北マリアナ諸島	ゴレンシ、マカダミア、カンキツ属、ココヤシ属、シダノキ属、レイシ属、Aegle属(ミカン科)、Bruguiera属(ヒルギ科)、Coccoloba属(タデ科)、Durio属(ハンヤ科)、Limoria属(ミカン科)、Macadamia属(ヤマモガシ科)、Manilkara属(アカテツ科)、マメ科植物	成虫の体長6.5～7.5mm、開帳16～23mm。終齢幼虫の体長12mm。果実や豆莢の表面に1卵ずつ産卵する。幼虫で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫は果実や豆莢に穴を開け侵入し、種子を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 16 23 43 55 62 64	非検疫有害動植物
21	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナジラミ科	<i>Dialeurodes citri</i>	ミカンコナジラミ	アジア(日本を含む)、欧州、北米、中南米	かき、イチジク属植物、サクラ属植物、スノキ属植物、ナン属植物等	成虫の体長は1mm前後、体色は淡黄色で白粉におおわれ、翅は白色不透明。卵は楕円形、長い柄をもち長径約0.2mm。幼虫は淡緑色、へん平。蛹殻は淡黄緑色、へん平、長さ約1.3mm。蛹で越冬。年3回発生。卵は若葉の裏面に約100個、ランダムに産みつけられる。孵化幼虫は短時間歩行した後、固着する。葉裏に群生する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成・幼虫による葉の吸汁、幼虫の排泄物によるすす病の誘発により樹勢が衰える。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動植物
22	有害動物	節足動物	カメムシ目	カメムシ科	<i>Dolycoris baccarum</i>	ブチヒゲカメムシ	日本、韓国、中国、インド、イスラエル、イラク、キプロス、トルコ、イタリア、デンマーク、ノルウェー、フランス、ブルガリア、ポーランド、旧ソビエト連邦	オクラ、ケイトウ、ゴマ、シソ、トルコギキョウ、ニンジン、ハスカップ、ワタ、アリウム属植物、アブラナ科植物、イネ科植物、キク科植物、マメ科植物	成虫の体長は約12mm。色彩には変化があるが、赤褐色又はあざき褐色が多い。頭部は黒褐色を帯びる。四国地方では年2世代。成虫で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成・幼虫が発育虫の子実から養分を吸収する。イネの場合は品質を低下させ、斑点米を生じさせるが、タイズの場合は、イチモンジカメムシやアオクサカメムシより被害は小さい。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 57 60	非検疫有害動植物
23	有害動物	節足動物	カメムシ目	グンバイムシ科	<i>Dulinius conchatus</i>	ヘクソカズラ	日本、東南アジア	ヘクソカズラ	成虫の体長は3mm	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉の裏から汁を吸い、吸汁された葉は白い斑点が無数にできる。葉裏には黒い排泄物とともに群生した本種の成虫と幼虫が認められる。米国では本種は侵入雑草であるヘクソカズラ(Paederia foetida)の生物農薬として利用されている。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	43 48 65	非検疫有害動植物
24	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Dysaphis foeniculus</i>	ニンジンオマルアブラムシ	日本、インド、パキスタン、中央アジア、中東、南ヨーロッパ、地中海沿岸、アフリカ、北米、南米、オーストラリア、ニュージーランド	インンド属植物、ウイキョウ属、オオウイキョウ属、ギンギン属、ニンジン属植物、マツバゼリ属植物	体長1.6～2.3mm。灰緑色で、灰白色のろう物質をつけている。セリ科植物の根元に寄生。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	莖葉に寄生し吸汁する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	5 6 43 51 52	非検疫有害動植物
25	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナカイガラムシ科	<i>Dysmicoccus wistariae</i>	セスジコナカイガラムシ	日本、朝鮮半島、英国、北米、ミクロネシア	イチイ、エノキ、カエデ、カキ、カナメモチ、キャラボク、ケヤキ、サクラ、スギ、スズカケノキ、ズミ、プラタナス、ナンシ、リンゴ	成虫の体長は最大5mm。ワラジムシ形で白い粉に覆われた虫が見られる。体表は紫褐色で白色粉状のろう質分泌物で覆われている。背中線の両側に2条の暗色凹斑がある。本州では年1回発生で幼虫越冬すると考えられている	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幹の割れ目や枝で吸汁加害するが、ときに果実にも吸汁し、すす病を誘発する	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	15 17 23 34 43 60	非検疫有害動植物
26	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Earias cupreoviridis</i>	ワタリンガ	東アジア(日本を含む)、ベトナム、インド、パキスタン、アフリカ中央部、マダガスカル、モーリシャス	ワタ、ツナソ属植物	老熟幼虫の体長は14～17mm。蛹の体長は雌7.5mm内外、雄6.5mm内外。卵円形で赤褐色。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫がワタの葉柄、蕾花、萼等を摂食するが、甚だしい時は減収となる。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 15 23 34 43 58	非検疫有害動植物
27	有害動物	節足動物	カメムシ目	ワタアブラムシ科	<i>Eriosoma lanigerum</i>	リンゴワタムシ	世界各地(日本を含む)	バラ科植物	無翅胎生雌虫の体長約2mm、体色は暗赤褐色。白色綿状物で覆われる。有翅胎生雌虫の体長は約2mm、体色は、頭部及び胸部は黒褐色。樹皮の裂け目や被害部に若齢幼虫態で越冬し、翌春に無翅胎生雌虫となり産子する。9月に有翅胎生雌虫が出現して移行する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	枝、樹幹、葉柄、根、生長点に寄生する。枝にこぶを発生させ、樹勢を悪くさせる。	登録農業がある。天敵導入は有効である。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動植物
28	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Eulachnus thunbergii</i>	マツノホソオアブラムシ	日本、朝鮮半島、台湾、インド、オーストラリア	マツ属植物	体は大形で細長。無翅胎生虫は緑色、白色ろう物質でおおわれる。主として葉に寄生する特性がある。秋に両性世代になり、卵生雌は葉に点々と産卵する。時にマツ林で大発生する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉に寄生する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 31 34 43	非検疫有害動植物

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
29	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナカイガラムシ科	<i>Ferrisia virgata</i>	フタスジコナカイガラムシ	[アジア]日本、インド、インドネシア、カンボジア、クリスマス島(豪領)、ココス諸島(豪領)、シンガポール、スリランカ、タイ、台湾、チャゴス、中華人民共和国、マレーシア、ミャンマー、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、ラオス [中東]アラブ首長国連邦、イエメン、イラン、サウジアラビア [欧州]フランス [アフリカ]アンゴラ、ウガンダ、エジプト、エチオピア、ガーナ、カメルーン、ギニア、ケニア、コートジボワール、コモロ、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国、サントメ・プリンシペ、ザンビア、シエラレオネ、ジンバブエ、スーダン、セーシェル、セネガル、ソマリア、タンザニア、トーゴ、ナイジェリア、マダガスカル、マラウイ、南アフリカ共和国、モザンビーク、モーリシャス [北米]アメリカ合衆国 [中南米]アルゼンチン、英領西インド諸島、エクアドル、ガイアナ、キューバ、グアテマラ、コスタリカ、コロンビア、ジャマイカ、スリナム、セントクリストファー・ネイビス、ドミニカ国、トリニダード・トバゴ、ニカラグア、ハイチ、バハマ、パナマ、バミューダ、パラグアイ、バルバドス、プエルトリコ、ブラジル、米領西インド諸島、ベネズエラ、ペリウズ、ペルー、ポリネシア、ホンジュラス、マルティニーク島、メキシコ、南領西インド諸島 [大洋州]オーストラリア、北マリアナ諸島、キリバス共和国、クック諸島、サモア、ソロモン、ツバル、トンガ、ニューカレドニア、バヌアツ、バブアニューギニア、パラオ、フィジー、仏領ポリネシア、マーシャル、ワリス・フテナ諸島	アセロラ、アボカド、アメダモノキ、イヌホオズキ、オクラ、カカオ、カシューナッツ、ギニアアブラヤシ、キマメ、キャッサバ、ギョウジョウ、ギンネム、キンマ、グアバ、クロヨナ、ココナツ、コショウ、コーヒー、ササゲ、ザクロ、サツマイモ、サトウキビ、ショウガ、セイヨウカボチャ、タバコ、タロイモ、トウモロコシ、トマト、ナス、ナツメヤシ、パインアップル、バナナ、パパイヤ、ハマベブドウ、パンレイシ、ビルマネム、ペポカボチャ、ヘンヨウボク、マンゴー、ヨーロッパブドウ、ラッカセイ、レイシ、イチジク属、インゲンマメ属、エノキグサ属、カンキツ属、サボジラ属、ツナソ属、ドラセナ属、バンレイシ属、フヨウ属、ワタ属	雌成虫体長約3.0~4.5mm。年間4~6世代。本種は雌成虫で大枝のすきまや落ち葉上で越冬する。単為生殖。	—	ア 日本未発生 半永続伝搬:cocoa swollen shoot virus 伝搬様式不明:cocoa Trinidad virus, piper yellow mottle virus イ 日本既発生なし	無	発生が多いときは生長が止まり、さらに激しい場合には枯死することもある。	登録農薬あり:カンキツ類等のコナカイガラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	62 85 94 95 101 102	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
30	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Fiorinia florinae</i>	コノハカイガラムシ	日本、バミューダ諸島、ジャマイカ、バルバドス	アデク、アレカヤシ、ココヤシ、シロテツ、ソテツ、ノヤシ、バンレイシ、ヒメイタビ、マンゴウ、ムニンヌグス、ムニンシロガモ、ヤブニツケイ	雌成虫の介殻は長さ1.5mm内外、黄褐色~褐色。雄はみられない。寄主植物の葉面、細枝に寄生する。産卵は雌成虫の介殻下におこなわれる。年3世代との記録がある。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉面及び細枝に寄生し、吸汁する	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 17 23 43	非検疫有害動物
31	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Fiorinia theae</i>	チャコノハカイガラムシ	日本、台湾、インド、スリランカ、フィリピン、アメリカ合衆国	カンキツ類、クロツグ、サカキ、サザンカ、チャ、チャツバキ、ツバキ、ハマヒサカキ、ヒサカキ、ヒョウタンカズラ、モクレイン、モチノキ属植物	雌成虫の介殻は長さ1.3~1.6mm、黄褐色~褐色、楕円形。雄の介殻は長さ1mm程度、白色。背面に3条の隆起線をもつことがある。雄成虫は有翅。発生は不規則で年間を通じて各態のものが見られる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉、細枝に寄生し、吸汁する。葉裏に群生し、雄の分泌する綿毛状のロウ物質により葉裏が白くなり、美観を損ねる。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 17 23 34 43	非検疫有害動物
32	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Frankliniella fusca</i>	ウスグロアザミウマ	[アジア]日本 [欧州]オランダ [北米]カナダ、アメリカ合衆国 [中南米]メキシコ、キューバ、マルティニーク島、プエルトリコ	アマリス、トウガラシ、ササゲ、スイカ、ダイズ、タバコ、トウモロコシ、トマト、ラッカセイ、ワタ	不完全変態であるが、活発に行動する2期の幼虫期のおと成虫となる前に摂食せず行動も鈍くなる2期の蛹期がある。幼虫及び成虫は、若葉や花に生息し、花粉や花の組織細胞、若葉の柔組織表皮細胞から内容物を吸い出し摂食する。Tomato spotted wilt virusの媒介昆虫としても知られる。	—	ア 日本未発生 トスポウイルス(詳細不明) イ 日本既発生 Tomato spotted wilt virus (種として日本既発生。系統の存在が海外においても知られているが詳細は不明。)その他のトスポウイルス	無	直接的被害としては、若葉や花芽への吸汁による花弁の傷、葉の銀色化や縮れ、花器の歪曲や退色が起こる。ワタ、ササゲ、ラッカセイ及びトウモロコシの苗では、特に影響大きい。間接的には、Tomato spotted wilt virus等を媒介することによる被害を起こす。北米でラッカセイ、ワタ、タバコ等の大害虫として知られているが、国内では目立った被害は報告されていない。	登録農薬あり:タバコ、ダイズ、トマト等のアザミウマ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は農業への影響が世界的にも重要視されているトスポウイルスを媒介することから、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 84 99 100 101 102	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
33	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Frankliniella tenuicornis</i>	カホンカハナアザミウマ	[アジア]日本、大韓民国、中華人民共和国、モンゴル [欧州]英国、旧ソ連、スロバキア、チェコ、フィンランド、ポーランド [北米]アメリカ合衆国、カナダ [大洋州]オーストラリア	ソルガム類、イネ、エンバク、オオムギ、コムギ、トウモロコシ、ライムギ	雌成虫体長約1.4mm。雄成虫体長約1.2mm。成虫は早春から活動し年間数世代を経過する。越冬は成虫でイネ科草原の土壌表層で行う。	—	ア 日本未発生 伝搬様式不明:tomato varamin virus (=Tomato fruit yellow ring virus) イ 日本既発生なし	無	成虫と幼虫が若い葉と花穂に集まって食害する。特に幼虫が花穂に集中するので多発すると結実に影響するが、日本では発生頻度、密度とも低く実害はない。	登録農薬あり:イネのアザミウマ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 94 95 99 101 102 104	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
34	有害動物	節足動物	コウチュウ目	ハムシ科	<i>Galerucella griseescens</i>	イチゴハムシ	東アジア(日本を含む)、欧州	イタドリ、オランダイチゴ、ミソソバ、ギシクシ属植物	成虫は体長3.7~5.2mm、終齢幼虫は6mm、蛹は4mmである。卵は葉裏に10~30の卵塊として産みつけられ、幼虫は葉を摂食し、葉上で蛹化する。年3~4回発生が見られ、成虫で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫は初め葉裏から葉肉を摂食し、後に穴を開ける。	登録農薬はない。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 18 23 34 43 60	非検疫有害動物
35	有害動物	節足動物	アザミウマ目	クダアザミウマ科	<i>Haplothrips ganglbaueri</i>		本州以南の日本及びアジアの熱帯・亜熱帯域に広く分布する。	バナナ、ヨモギ類、イネ科	雌成虫の体長は1.8~2.0mm、体色は暗褐色。雄成虫の体長は、1.5~1.7mm。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	イネ科草本類等の葉に寄生し、穂や葉を白化させる。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 24 43 46	非検疫有害動物
36	有害動物	節足動物	アザミウマ目	クダアザミウマ科	<i>Haplothrips leucanthmi</i>	ツメクサクダアザミウマ	日本、中国、欧州、北米	タンポポ、ヘラオオハコ、マメ科植物	雌成虫は体長約2mm、暗褐色。年2世代で6月から9月まで活動する。主に花に寄生する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成虫及び幼虫共に花粉と花弁を摂食し、花弁に褐色斑を生じさせる。多発時には花を萎縮させる。	登録農薬がある。	23 34 43 60	非検疫有害動物 [SYN: Haplothrips niger]	

No.	動/補	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Helicoverpa armigera armigera</i>	オオタバコガ	北アフリカ、ヨーロッパ、アジア大陸部、スリランカ、日本、インドネシア、フィリピン	トウモロコシ、シコクビエ、キビ、ワタ、オクラ、カキ、キャベツ、ダイコン、スイカ、キュウリ、メロン、レタス、キク、ニンジン、トマト、ピーマン、ナス、タバコ、カーネーション、ナデシコ、セキチク、バラ、トルコギキョウ等広食性	卵は1個ずつ植物の表面に産卵され、卵塊で産卵されることはない。卵の大きさは、直径約0.5mmで高さ約0.48mmである。1齢幼虫は2mm程度で、頭部と前胸背板及び刺毛基板は黒色である。1齢幼虫から皮膚に小さな刺を備える。終齢幼虫の体型は円筒形で体長は38～42mm、体色は緑黄色から茶褐色、黒褐色のものまで変異が激しい。成虫は前翅長15mm内外でタバコガに似る。年間2～3世代を繰り返し、施設内では4～5世代経過するとみられる。施設内のほか、西南暖地では屋外越冬も可能である。8～9月ごろに北海道、東北地方など中部以北にも採集例がある。	パファニューギニア、グアム、オーストラリア、ニュージーランド、ニューカレドニア、フィジー、トンガ、インドネシア、フィリピンに分布するHelicoverpa armigera conferta カントン島(太平洋中央部)に分布するHelicoverpa armigera commoni	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	多くの植物を餌にできる広食性の害虫。幼虫は葉を食害するほか、新芽、花蕾、萼の中や果実内に食入し、中を空にする。次々と移動して加害する。	登録農薬あり:キャベツ、レタス、ナス、キク等のオオタバコガ及びピーマン、トウガラシ類のタバコガ類	名義タイプ亜種であるHelicoverpa armigera armigeraは日本に分布し、公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず。非検疫有害動植物と位置づけられる。日本未発生亜種であるHelicoverpa armigera conferta及びHelicoverpa armigera commoniについては病害虫リスクが明らかでないため、検疫対象。	7 60 102 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114	非検疫有害動植物(日本既発生亜種のみ)
	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Helicoverpa assulta assulta</i>	タバコガ	日本を含むアジアからオーストラリア、南太平洋の諸島にかけ広く分布	ピーマン、タバコ、トマト、ホオズキ、ナス、トウガラシ類等の多くのナス科植物	卵は0.4mm内外、終齢幼虫は体長約40mm。体はイモムシ状で第8腹節の背面少し角張る。刺毛はやや目立つ。成虫は前翅長14～15mmでオオタバコガに似る。年間2～3世代を繰り返し、施設内では5～6世代経過するらしい。暖地では蛹態で土中越冬する。	サハラ砂漠以南のアフリカ大陸に分布するHelicoverpa assulta afra	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫は花蕾や果実内に食入し、花が咲かない、食用にならないなどの被害を与える。枝の中を食害することもあり、食害部分より上が枯れるため被害はさらに大きくなる可能性がある。	登録農薬あり:タバコ、ピーマン、トウガラシ類等のタバコガ及びタバコガ類	名義タイプ亜種であるHelicoverpa assulta assultaは日本に分布し、公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず。非検疫有害動植物と位置づけられる。日本未発生亜種であるHelicoverpa assulta afraについては病害虫リスクが明らかでないため、検疫対象。	7 60 102 105 106 107 115 109	非検疫有害動植物(日本既発生亜種のみ)
4	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Hercinothrips femoralis</i>	クリバネアザミウマ	日本、韓国、トルコ、欧州、カナリア諸島、シエラレオネ、タンザニア、ナイジェリア、北米、中南米、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ	広食性	雌成虫は体長1.2～1.5mmで、雄の存在は知られておらず、単為生殖を行う。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉を舐めるように吸汁加害し、吸汁による白変及び汚斑また排泄物の付着が報告されている。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 34 43	非検疫有害動植物
80	有害動物	節足動物	チョウ目	ツトガ科	<i>Herpetogramma licarsisalis</i>	クロオビクロノメイガ	日本、中国、台湾、インド、インドネシア、スリランカ、フィリピン、マレーシア、エジプト、アメリカ合衆国、太平洋地域、オーストラリア、ニュージーランド	イネ科植物	成虫の閉長は約20mm、体長約13mm。翅は淡黄褐色。老齢幼虫の体長は約20～25mm。産卵場所は地際部。卵から成虫まで約4週間を要する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫が茎葉を摂食する。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 8 16 22 23 43 54	非検疫有害動植物
75	有害動物	節足動物	チョウ目	タテハチョウ科	<i>Hestina assimilis</i>	アカボシゴマダラ	東アジア(日本を含む)、ベトナム	ヤナギ、エノキ属植物	外見上、後翅表面の垂外縁に並ぶ赤色斑列が大きな特徴となる。関東地方に分布している名義タイプ亜種と見られる個体は、春型がかなり白化するが、奄美大島等に分布する亜種は飼育でも白化しない。奄美大島では3月下旬～11月下旬にわたって連続的に数回の発生を繰り返し、発生回数は年4～6回と推定されている。4～5齢幼虫で越冬する。関東では11月まで葉上にいる幼虫が観察されており、中齢以降の様々なステージの幼虫で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫が主に成葉を摂食する。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	3 25 43 50 63 64	非検疫有害動植物
68	有害動物	節足動物	コウチュウ目	ゾウムシ科	<i>Hypera postica</i>	アルファルフアタコゾウムシ	[アジア]日本、インド、インドネシア、キプロス、パキスタン、フィリピン、ブルネイ、マレーシア、モンゴル [中東]アフガニスタン、イスラエル、イラク、イラン、サウジアラビア、トルコ、レバノン [欧州]アイルランド、アゼルバイジャン、アルバニア、アルメニア、イタリア、ウクライナ、ウズベキスタン、英国、エストニア、オーストラリア、ギリシャ、クロアチア、キルギス、クロアチア、ジブラルタル(英領)、スイス、スウェーデン、スペイン、スベイン、スロバキア、スロベニア、セルビア、タジキスタン、チェコ、ドイツ、トルクメニスタン、ルルウェー、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポルトガル、マルタ、モンテネグロ、ラトビア、リトアニア、ルーマニア、ロシア [アフリカ]アルジェリア、エジプト、チュニジア、リビア [北米]アメリカ合衆国、カナダ [中南米]メキシコ [大洋州]オーストラリア、パプアニューギニア、サモア、米領サモア	アズキ、インゲンマメ、カボチャ、キュウリ、ササゲ、シロウリ、スイカ、ダイコン、ダイズ、マクワウリ、メロン、マメ科牧草	卵の大きさは0.55～0.76mmで黄色、4齢幼虫は体長約7～10mm、幅2.25mmで暗緑色、背部に白色線を有する。蛹は体長4.0～5.5mm、幅3.0～4.5mmで緑色。成虫は体長3.0～6.5mmで褐色。日本では通常は年1世代で、成虫は5月に出現し、マメ科植物などを摂食した後夏眠し、10月頃から再び活動を始める。越冬休眠はせず、12月頃から5月にかけて産卵し、幼虫は3月頃から出現して4月に最も多くなる。老熟幼虫は茎葉、地際部などに嚙を作って蛹化する。	ア 日本未発生伝搬様式不明: Broad bean mottle virus イ 日本既発生報告無し	無	ヨーロッパ原産で、アルファルファなどのマメ科牧草の世界的な害虫として知られる。日本では1982年に九州および沖縄で初めて発見された。ウマゴヤシ属植物を中心とした雑草を加害していたが、分布拡大に伴いレンゲの被害が大きくなり、養蜂業に被害を与えている。また、成虫がメロン、キュウリ、ダイコンなども加害しているが、被害は軽微である。	登録農薬あり:マメ科牧草等のハムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動植物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する植物に付着するもの(を除く)	72 76 94 95 99 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)	
17	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Hyperomyzus lactucae</i>	チシャミドリアブラムシ	[アジア]中国、インド、日本 [中東]イラン、イラク、イスラエル、ヨルダン、レバノン、パキスタン、サウジアラビア、トルコ、イエメン [欧州]ポルトガル、ベルギー、ブルガリア、キプロス、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、アイルランド [アフリカ]アルジェリア、ブルンジ、コンゴ民主共和国、エジプト、エチオピア、ケニア、マラウイ、モーリシャス、モロッコ、モザンビーク、ルワンダ、南アフリカ共和国、タンザニア、チュニジア、ウガンダ、ジンバブエ [北米]カナダ、アメリカ合衆国 [中南米]メキシコ、コスタリカ、ジャマイカ、アルゼンチン、ブラジル、チリ、コロンビア、ペルー [大洋州]オーストラリア	サトウキビ、ジャガイモ、テンサイ、レタス、スグリ属、ノゲシ属、ヒヨコマメ属	無翅胎生雌成虫は体長1.3-2.1mmと小型で暗褐色～黒色をしており、幼虫は淡紫色ないし褐色を帯びた黒色である。欧州ではスグリ属からノゲシ属に寄主間移動し周年発生するが、より温暖な地域では周年発生しない。ニュージーランドでは休眠中のクロスグリの芽のわきで卵で越冬し、早春に孵化する。4齢の幼虫期を経て成虫になり、30日間に40-50頭の若虫を産む。夏季はノゲシ上で多くの世代が発生する。	ア 日本未発生永続的伝搬: lettuce necrotic yellow virus, southistle yellow vein virus 半永続的伝搬: beet yellow stunt virus イ 日本既発生 lettuce mosaic virus (種として日本既発生。系統の存在が海外においても知られているが詳細は不明。)	無	春に発生すると、若枝先端の葉に滴曲を生じさせる。その被害は5-6月に顕著となる。被害はそれほど甚大ではなく、通常いくつかの散在した樹に限定される。	登録農薬あり:野菜類、非結球レタス等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動植物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する植物に付着するもの(を除く)	66 72 73 95 100 101 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)	
64	有害動物	節足動物	カメムシ目	ワタフキカイガラムシ科	<i>Icerya purchasi</i>	イセリアカイガラムシ	世界各地(日本を含む)	広食性	成虫は楕円形、体長4～6mm。背面は帯黄色のロウ物質に被われ、体周縁にガラス繊維状の物質を放射状に分泌する。卵、孵化幼虫ともに橙赤色。孵化幼虫は新梢や葉裏に寄生する。2齢以降も不活発ながら歩行可能で、枝、幹等にも移動して寄生する。越冬は主として成虫で行われる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫・雌成虫が主に細い枝や葉裏に寄生し、吸汁する。寄主植物の生育阻害、葉の萎れ・脱落等を招く。また、排泄物にすす病が生じ果実、葉の汚損が起こる。	登録農薬がある。天敵導入は有効である。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物

No.	動/補	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
65	有害動物	節足動物	カメムシ目	ワタフキカイガラムシ科	<i>Icerya seychellarum</i>	キイロワタフキカイガラムシ	アジア(日本を含む)、コロンビア、仏領ギアナ、アフリカ東部、大洋州	広食性	最大体長10mmになり、体表は白色の口ウ物質で覆われる。単為生殖。日本では成虫で越冬し、年1回の発生である。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	茎や葉裏に寄生し、吸汁するとともに排泄液(甘露)にす病が誘発され、生育が阻害される。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物
54	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Lepidosaphes beckii</i>	ミカンカキカイガラムシ	日本、中国、東南アジア、南アジア、アフリカ、欧州、北米、中南米、大洋州	バナナ、マンゴウ、カンキョ属植物等	雌成虫の介殻は大きさ1~2mm、雄幼虫の介殻は小形で細い(約1mm)。年3~4回発生する。幼虫と雌成虫が枝、幹、葉、果実等の地上部の各部位に寄生する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	枝、幹、葉、果実等の地上部の各部位に寄生し、葉面に黄斑を生じたり、果実に着色ムラや凹凸を作る。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物
55	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Lepidosaphes camelliae</i>	ツバキカキカイガラムシ	日本、中国、北米	ユズリハ、ツバキ属植物、モチノキ属植物	雌成虫の介殻は大きさ2.5~3mm、雄幼虫の介殻は小形で細い。葉裏に多く寄生する。年2回発生。主として雌成虫で越冬するが、発生は不揃いで2齢幼虫で越冬するものもみられる。孵化幼虫は介殻から出て短時間のうちに寄主植物に定着する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成・幼虫が葉の裏面に多く寄生して吸汁する。寄生部位に黄斑を生じ美観を損ねる。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動植物
56	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Lepidosaphes laterochitnosa</i>	モクダチバナカキカイガラムシ	日本、中国、香港、台湾、フィリピン、マレーシア、ハワイ、ミクロネシア	広食性	雌成虫生時の外観は、殻がカキカイガラ状、暗紫褐色で、長さ3~4mm。虫体は紡錘形、白色。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉及び枝で吸汁加害する	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 17 20 23 34 43 60	非検疫有害動植物
49	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Lepidosaphes machili</i>	タバカキカイガラムシ	世界各地(日本を含む)	シキミ、サイカチ、キハダ、クスノキ科植物、ラン科植物、ヒノキバヤドリギ	雌成虫の介殻は大きさ3~3.8mm。枝、幹、葉面など地上部の各部位に寄生する。少なくとも年2回の発生で、主として成虫で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫と雌成虫が葉面に寄生し、ときに温室内のシンデジウムに多発して美観を損ねる。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動植物
11	有害動物	節足動物	アザミウマ目	クダアザミウマ科	<i>Liothrips vaneeckei</i>	ユリクダアザミウマ	日本、スリランカ、ユーラシア大陸(東南アジアを除く)、アフリカ(地中海沿岸)、北米、ニュージーランド	ユリ	成虫は、体長雌2.3~2.5mm、雄2.0~2.4mm、体色は黒色。常にユリ鱗茎の隙間に生息。年間発生回数は明らかでないが、北海道で4~5世代といわれる。成虫の生存期間は1~2ヶ月で、1雌あたりの産卵数は30~40卵。成虫及び幼虫共にユリ鱗茎の隙間で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成虫及び幼虫共にユリの鱗片表皮を食害し、食痕はやや陥没して黄褐色となる。また排泄物による汚損から食用ユリでは商品価値が低下する。花ユリでは、食痕から腐敗菌の侵入や他害虫の寄生を容易にし、二次的被害をもたらすことが多い。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43 46 60	非検疫有害動植物
18	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Lipaphis erysimi</i>	ニセダイコンアブラムシ	[アジア]日本、インド、インドネシア、シンガポール、スリランカ、タイ、台湾、中華人民共和国、ネパール、バングラデシュ、フィリピン、ブータン、マレーシア、ミャンマー、ラオス [中東]イエメン、イスラエル、イラク、イラン、トルコ、パキスタン [欧州]アイルランド、イタリア、英国、オーストリア、オランダ、キプロス、クロアチア、スウェーデン、スロベニア、セルビア、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポルトガル、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国、モンテネグロ、ロシア [アフリカ]ウガンダ、エジプト、エチオピア、エリトリア、カメルーン、ケニア、ザンビア、シエラレオネ、ジンバブエ、スーダン、タンザニア、ナイジェリア、マダガスカル、南アフリカ共和国、モーリシャス、モロッコ、リビア [北米]アメリカ合衆国、カナダ、バミューダ [中南米]アルゼンチン、ガイアナ、スリナム、ニカラグア、ブラジル、ベネズエラ、ペルー、メキシコ、キューバ、トリニダード・トバゴ [大洋州]オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニア、グアム、ソロモン、フィジー	ストック、ダイコン・ハクサイ・キャベツ・カブ・カリフラワー・ワサビ等アブラムシ科野菜	無翅胎成虫は楕円形で 大きさ1.4~2.4mm、黄~暗緑色で白色の口ウ物質に覆われる。有翅胎成虫は長楕円形で大きさは1.4~2.2mm、頭部、胸部は黒色で、腹部は緑~暗緑色。暖地では無翅胎生雌虫で越冬することが多いが、寒地では卵で越冬する。産卵雌虫と雄虫は11月頃出現して交尾し、産卵する。雄虫は無翅である。卵は3月始めに孵化し、下旬頃に幹母が出現する。さらに無翅胎生雌虫で越冬したものも繁殖して、かなり高密度になるが、秋季ほど高くない。やがて有翅胎生雌虫が出現して夏作の野菜や野草に分散移住する。夏季は個体数も少なくなわずかに寄生が見られる。夏の終わりがころに有翅胎生雌虫が出現して繁殖し、9月下旬頃から著しく高密度になる。	—	ア 日本未発生 非永続伝搬: Nasturtium mosaic virus, Stock (Matthiola) mosaic virus 伝搬様式不明: Pea mosaic virus, Poison hemlock ringspot virus, Chinese small cabbage mosaic virus イ 日本既発生 Bean common mosaic virus, Bean yellow mosaic virus, Beet mosaic virus, Beet yellows virus, Cauliflower mosaic virus, Celery mosaic virus, Cucumber mosaic virus, Onion yellow dwarf virus, Pea mosaic virus, Poison hemlock ringspot virus, Potato virus Y, Radish mosaic virus, Sweet potato feathery mottle virus, Tobacco vein-banding mosaic virus, Turnip mosaic virus, Zucchini yellow mosaic virus	無	葉裏に群生して吸汁加害する。生育が著しく阻害され、時には枯死することもある。	登録農業あり: 野菜類、花き類、観葉植物等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動植物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合はベクターとしての病害リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 75 94 95 99 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
90	有害動物	節足動物	ハエ目	ハモグリバエ科	<i>Liriomyza brassicae</i>	アブラナハモグリバエ	アジア(日本を含む)、スペイン、ドイツ、ポーランド、アフリカ、北米、中南米、大洋州	ノウゼンハレン属植物、モクセイソウ属植物、アブラナ科植物	成虫の体長は約3mmで、有性生殖を行い、年間を通じて発生する。卵は葉の表面の下に産卵される。幼虫は葉の内部で生育し、土中で蛹化する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫が、葉の内部組織を摂食し、葉にひも状の後をつける。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43	非検疫有害動植物
91	有害動物	節足動物	ハエ目	ハモグリバエ科	<i>Liriomyza huidobrensis</i>	アシクロハモグリバエ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、インド、スリランカ、中東、欧州、コモロ、モーリシャス、モロッコ、レユニオン、セーシェル、南アフリカ、カナダ、中南米、グアム	広食性	成虫の体長は約2mm。翅長は1.6~2.5mm。老熟幼虫は体長3mm前後で体色は乳白色。カリフォルニアでは1世代あたり17~65日とみられる。卵は葉の表皮下に産みつけられる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成虫は葉の中に産卵。葉に幼虫が潜孔し、葉肉を摂食する。不規則な線状の食害痕を作る	登録農業がある。 物理的防除法(黄色粘着フィルム、防虫ネット、近紫外線カットフィルム、蒸しこみ・太陽熱等の利用)が有効とされている。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 38 43 56	非検疫有害動植物
92	有害動物	節足動物	ハエ目	ハモグリバエ科	<i>Liriomyza sativae</i>	トマトハモグリバエ	日本、中国、インド、インドネシア、スリランカ、タイ、ベトナム、マレーシア、中東、ウズベキスタン、カメルーン、ジンバブエ、スーダン、ナイジェリア、北米、中南米、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア	広食性	成虫の体長1.3~2.3mm、翅長1.25mm(雄)~1.7mm(雌)、3齢幼虫の体長は3mm。最大で年24回発生が知られている。卵は葉の表皮下に産みつけられる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成虫は葉の中に産卵する。葉に幼虫が潜孔し、葉肉を摂食する。不規則な線状の食害痕を作る	登録農業がある。 物理的防除法(黄色粘着フィルム、防虫ネット、近紫外線カットフィルム、蒸しこみ・太陽熱等の利用)が有効とされている。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 34 43 56 60	非検疫有害動植物

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
78	有害動物	節足動物	チョウ目	ハマキガ科	<i>Loboschiza koenigiana</i>	センダンヒメハマキ	日本、台湾、中国、インド、ニューギニア、オーストラリア、ミクロネシア	センダン	開張 11~13mm。関東における成虫の出現は7~9月。暖地性。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫がセンダンの葉を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	15 23 43	非検疫有害動植物
87	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Mamestra brassicae</i>	ヨトウガ	東アジア(日本を含む)、インド、イラン、シリア、トルコ、パキスタン、モンゴル、レバノン、欧州、リビア	広食性	成虫の開張40~47mm、全体は灰褐~灰黒色。老熟幼虫は、体長40~45mm、体色は個体変異に富む。関東以西では年2世代で蛹で夏季休眠する。東北地方及び北海道では年2~3世代で夏季休眠はない。越冬は、共に土中で蛹態移行される。中齢以降は、昼間は地中に隠れ、夜間に活動して暴食するようになることから、夜盗虫(ヨトウムシ)とも呼ばれる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	典型的な広食性で寄主範囲が極めて広く、幼虫はイネ科以外の各種の作物を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物
81	有害動物	節足動物	チョウ目	ツトガ科	<i>Maruca vitrata</i>	マメノメイガ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、南アジア、イラン、英国、デンマーク、フランス、ベルギー、アフリカ、アメリカ合衆国、中南米、オーストラリア、太平洋地域	マメ科植物	成虫の前翅長約12~14mm。前翅は黄褐~暗褐色で白色透明の紋を有し、後翅は外縁部の褐色部分を除き白色透明。終齢幼虫の体長は17~20mmで、体色は薄緑又は薄茶色。幼虫は3令までは群をなし、4~5令は分散する。北海道では年1~2回、本州中部では年3回発生し、幼虫で越冬するとされるが、早春及び晩秋でも成虫が灯火に飛来することがある。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫がマメ科(ササゲ、アズキ、インゲン等)の花、茎及び莢の内部に食い入る。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 14 16 23 34 43 60	非検疫有害動植物
76	有害動物	節足動物	チョウ目	イラガ科	<i>Monema flavescens</i>	イラガ	日本、朝鮮半島、中国、ロシア(シベリア南東部)	カキ、クルミ、クリ、ザクロ、サルズベリ、サンゴジュ、チャ、ナンキンハゼ、ブルーベリー、ヤマモモ、カエデ属植物植物、カシ属植物植物、シラカンバ属植物植物、スズカケノキ属植物植物、ニレ科植物、バラ科植物、ヤナギ科植物	成虫は開張30~40mm。老熟幼虫の体長約25mm。体節の両側に肉質突起が並び、そこに多数の刺状突起を生じ、その先端は黒色の鋭い毒針となる。卵は長径約1.6mmの楕円形。黄白色。イラガ類の中で最も普遍的に見られる種で、年1回発生と2回発生ものものと混在する。樹上の細い枝や枝の股に作られた硬い約1cmの卵の様な繭の中で前蛹で越冬し、4月に蛹化する。成虫は葉裏に1~数個の卵を産む。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫はほとんど単独で生活し、若齢期には葉裏から葉肉だけを食べるが、大きくなると主脈のみを残して葉全体を摂食する。幼虫に刺されることによる被害もある。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動植物
48	有害動物	節足動物	カメムシ目	フィロキセラ科	<i>Moritzella castaneivora</i>	クワイガアブラムシ	日本	クリ	無翅雌成虫は体長約1mm、鮮明な黄褐色から紫色を帯びる。春に孵化した幼虫が雌花に移動し、そのまま産卵に寄生して成虫になり産卵する。秋に産性虫が現れ大小2型の卵を生む。大卵から雄、小卵から雌が生じ交尾後1卵が産まれる。枝、幹上で越冬。夏季には約1ヶ月で1世代を経過する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼果の落果、殻斗(イガ)の早期裂開等を引き起こす。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動植物
66	有害動物	節足動物	コウチュウ目	オサソウムシ科	<i>Myocalandra exarata</i>	サトウキビコソウムシ	日本、台湾、東南アジア、モーリシャス、マダガスカル	サトウキビ、 <i>Bambusa polymorpha</i> (ホウライイチク属)、 <i>Dendrocalamus strictus</i> (マテウ属)	成虫は体長4.2~6.1mmで、タケでは、損傷部や他の昆虫の穿孔孔に産卵する。幼虫は節間部を縦方向に穿孔する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	サトウキビやラタンの茎を摂食する。	登録農業はない。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 30 34 43	非検疫有害動植物
19	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Myzus ascalonicus</i>	ワケギコブアブラムシ	[アジア]日本 [欧州]英国、デンマーク、ノルウェー、フランス、ベルギー [北米]アメリカ合衆国 [大洋州]ニュージーランド	スマレ、セイヨウノコギリソウ、テンサイ、ハコベ、ミズタガラシ、オランダイチゴ属植物	無翅胎生雌虫の体長約1.6mm。淡黄色で斑紋を欠く。1977年から1978年にはイチゴで越冬。越冬は温室内の植物や貯蔵球根などで行われる。年間を通して単為生殖で繁殖している。産雌単為生殖を行う。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	ア 日本未発生 永続伝搬: Beet mild yellowing virus 非永続伝搬: Tobacco etch virus イ 日本既発生 なし	無	ミズタガラシ、ハコベ及びスマレに寄生する。本種のコロニーは貯蔵期間の終わりにエシャロット等の球根に発生し、新しい苗の奇形を引き起こす。	登録農業あり: オランダイチゴ、花き類等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 77 95 98 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
20	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Myzus hemerocallis</i>	カンゾウコブアブラムシ	日本、台湾、中国、インド、インドネシア、パキスタン、フランス、ケニア、南アフリカ、北米、中南米、オーストラリア、ニュージーランド	<i>Agapanthus umbellatus</i> (ユリ科)、キスゲ属植物	体は淡黄緑色。周年ワスレグサ類 <i>Hemerocallis</i> 上で生活すると思われる。卵越冬。葉身基部や重なり合った葉身の節間に多い。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	生長部の心部、新葉の裏面に寄生する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。	23 28 31 43	非検疫有害動植物
21	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Myzus ornatus</i>		[アジア]日本、インド、スリランカ、パキスタン、ネパール [中東]トルコ [欧州]アイルランド、アゾレス諸島、英国、オーストラリア、オランダ、旧ソビエト連邦、スイス、スウェーデン、チャネル諸島、デンマーク、ドイツ、フィンランド、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ホルトガル、ルーマニア [アフリカ]アンゴラ、エチオピア、ケニア、ジンバブエ、セントヘレナ、タンザニア、ナイジェリア、マディラ諸島、マラウイ、南アフリカ共和国 [北米]アメリカ合衆国、カナダ [中南米]アルゼンチン、エクアドル、グアテマラ、コスタリカ、コロンビア、チリ、西インド諸島、ブラジル、ベネズエラ、ペルー、ホンジュラス、メキシコ [大洋州]オーストラリア、ニュージーランド、バブアニューギニア、ハワイ	アザレア、インパチェンス、セントポーリア、ビオラ、ペゴニア、ペロニカ等の草本観賞用植物	無翅雌は体長1.0~1.7mmで胸腹部に対になった黒色模様を伴った淡黄褐色又はくすんだ緑色をしており、円筒状の触角はやや長い。若虫は明緑色で暗赤色の眼を持つ。完全単為生殖し、宿主の葉上に少数の個体で発生する。欧州北部の温室内のような好適環境下では、年間にわたって繁殖を続ける。多量の分泌物で葉を覆い、それに脱皮殻が付着して白くなる。	-	ア 日本未発生 永続伝搬: Coriander feathery red vein virus, Beet western yellows virus (syn Malva yellows virus), Filaree red leaf virus, Pea enation mosaic virus 非永続伝搬: Malva vein clearing virus, Primula mosaic virus 不明: Dandelion yellow mosaic virus イ 日本既発生 Beet western yellows virus, Strawberry crinkle virus	無	本種は密集したコロニーを作らないので、直接的な吸汁の被害はほとんど重要ではない。しかし、その分泌物がポット栽培においてしばしば問題となり、葉や花に付着した脱皮殻が美観を損ねる。	登録農業あり: 花き類等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	66 67 70 71 75 96 100 102	非検疫有害動植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く) [SYN: Myzus portulacae]

No.	動/補	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生の系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
22	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Neotoxoptera formosana</i>	ネギアブラムシ	東アジア(日本を含む)、欧州、北米、オーストラリア	アリウム属植物	無翅胎生雌成虫は体長1.8～2.0mm、黒褐色で光沢がある。有翅胎生雌成虫は体長約2mm、体色は無翅雌虫と同じ。夏季の生活は不詳であるが秋季～冬季には無翅胎生雌虫で生活する。ノビル等の野草にも寄生する。寒地では卵態で越冬するものと思われる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉に寄生する。生長阻害を起こす。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動物植物
79	有害動物	節足動物	チョウ目	ハマキガ科	<i>Olethreutes lacunana</i>	ミヤマウンモンヒメハマキ	日本、中国、欧州	イラクサ属植物、ハッカ属植物、リュウキンカ属植物等	開帳15mm内外。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫が葉を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	15 23 43	非検疫有害動物植物
23	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Ovatus nipponicus</i>	ハッカイボアブラムシ	日本、韓国	Mentha(ハッカ属)	成虫の体長は1.7～1.9mm、体色は黄色。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	ハッカの葉裏や柔らかい茎に寄生する。発生が多いときには葉が縮み、茎は萎凋する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	5 6 43 60	非検疫有害動物植物
46	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナジラミ科	<i>Parabemisia myricae</i>	ヤマモモコナジラミ	[アジア]日本、インド、中華人民共和国、ベトナム、台湾 [中東]イスラエル、トルコ、レバノン [欧州]イタリア、ウクライナ、キプロス、ギリシャ、スペイン、ポルトガル [アフリカ]ベネズエラ、グアドループ [北米]アメリカ合衆国 [大洋州]ハバアニューギニア	カンキツ類、サクランボ、アザレア、アンズ、ウメ、カキ、クワ、コウゾ、サツキ、シャクナゲ、チャ、ツツジ、ネクタリン、モモ、ヤマモモ	卵は白色～黒色。幼虫は透明であり、初齢幼虫は脚を有するが、2齢～4齢幼虫の脚は退化し、口器で植物体に付着する。4齢幼虫は体長0.89～0.97mm。雌成虫は0.92～1.42mm黄白色～薄紫色。雄成虫はまれ。単為生殖し、卵は葉の緑や表に産みつけられる。羽化後、幼虫は葉裏に移動し、吸汁寄生する。2～4齢幼虫まで食害する。成虫は朝夕飛翔し、食害、産卵に適した葉を探す。年間複数世代発生する。	—	A 日本未発生 永続若しくは半永続伝搬: Citrus Chlorotic Dwarf I 日本既発生 報告無し	無	成虫、幼虫が主として葉裏を吸汁加害する。寄主としてヤマモモのほか多くの樹木が知られている。本種はヤマモモ、カンキツ類等の常緑樹を冬寄主とし、夏寄主としてほかの樹種も加害する。5月ころクワで繁殖し被害を与えることがある。	登録農業あり:花き類・観葉植物等のコナジラミ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する植物に付着するもの(を除く)	72 81 94 95 99 102	非検疫有害動物植物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
57	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Parlatoreopsis pyri</i>	ナシクロホシカイガラムシ	日本、中国	針葉樹、カシ類等を除く多くの木本植物	雌成虫の介殻は長さ1～1.2mmで卵～長卵形、黄褐～灰白色。年2回発生、成虫で越冬し第一世代孵化幼虫は4月下旬～5月下旬に現れる。羽化幼虫は介殻から脱出後、短時間のうちに寄主に定着し、雌は終生移動することなく2齢幼虫を経て成虫となり、雄は蛹を経て有翅成虫となる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫、雌成虫が枝、幹に寄生し吸汁する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	17 23 34 43 60	非検疫有害動物植物
58	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Parlatoria camelliae</i>	ツバキクロホシカイガラムシ	日本、世界の温帯～熱帯	ガジュマル、ゲッケイジュ、サカキ、サザンカ、シイ、チャ、ヒイラギ、ヒサカキ、マサキ、マデバシイ、モクセイ、ヤブツバキ	雌成虫の介殻は長さ1.5～2mm、ほぼ楕円形、黄褐～灰褐色。雄幼虫の介殻は小形で細長い。年2回発生。主として成虫で越冬。孵化幼虫は介殻から出て短時間のうちに寄主に定着する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫と雌成虫が葉面にのみ寄生する。多発すると砂埃にまみれたようになり美観を損ねると共に生育を阻害する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	17 23 34 43 60	非検疫有害動物植物
59	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Parlatoria proteus</i>	ナガクロホシカイガラムシ	日本、韓国、ナウル、ソロモン	カンキツ類、ラン科植物、各種観葉植物	雌成虫の介殻は長さ1.5mm内外、ほぼ楕円形、黄褐～灰褐色。雄幼虫の介殻は小形で細長い。少なくとも年3回発生。羽化幼虫は介殻から脱出後、短時間のうちに寄主に定着し、雌は終生移動することなく2齢幼虫を経て成虫となり、雄は蛹を経て有翅成虫となる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫と雌成虫が葉面にのみ寄生する。多発すると砂埃にまみれたようになり美観を損ねると共に植物の生育を阻害する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	7 17 23 34 43 60	非検疫有害動物植物
39	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナカイガラムシ科	<i>Phenacoccus madeirensis</i>	マデイラコナカイガラムシ	日本、欧州、アフリカ、北米、中南米、ミクロネシア	広食性	単為生殖、年4～6世代を重ねると考えられる。幼虫で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	作物の変色等の生育阻害やすす病を引き起こす。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	7 34 43 60	非検疫有害動物植物
40	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナカイガラムシ科	<i>Phenacoccus solani</i>	ナスコナカイガラムシ	日本、スペイン、ジンバブエ、南アフリカ、北米、中南米、ハワイ、ミクロネシア	カンキツ類、スベリヒユ、タバコ、ナス、パイナップル、ピーマン、モンパノキ、アブラナ科植物等	年に数世代を繰り返し、年間を通して幼虫の発生が見られる。単為生殖を行い、成熟すると白色、綿状の口物質で卵室を形成して産卵する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉や茎等のほか地下部にも寄生する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	7 34 43 60	非検疫有害動物植物
24	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Phloeomyzus passerinii</i>	ドロノキワタアブラムシ	日本、中国、イラン、イスラエル、パキスタン、シリア、イタリア、英国、オランダ、ギリシャ、スペイン、ドイツ、ハンガリー、フランス、ベルギー、ロシア、エジプト、北米	ハコヤナギ(ボブラ)属	無翅胎生雌虫の体長は1.6-1.7 mm。有翅胎生雌虫の体長は1.5 mm。有翅雄虫の体長は雌より小さく約1mm。卵は長さ0.3-0.4 mm。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉に寄生し吸汁する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	2 7 43	非検疫有害動物植物
41	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナカイガラムシ科	<i>Planococcus kraunhae</i>	フジコナカイガラムシ	東アジア(日本を含む)、フィリピン、エチオピア、アメリカ合衆国	広食性	雌成虫は楕円形、体長2.5～4mmで背面は一律に白色粉状の口物質で被われるとともに体周縁に口物質からなる房状の突起を具える。新芽、花梗、果実、葉に寄生する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	カンキツでは奇形果を生じたり、寄生部位のホルク化がみられる。多発時には排泄物により葉や果実がベタついたり、すす病が誘発される。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動物植物
33	有害動物	節足動物	カメムシ目	カタカイガラムシ科	<i>Protospulvinaria pyriformis</i>	ナシガタカタカイガラムシ	日本、地中海沿岸地域、南アフリカ、世界の熱帯～亜熱帯	アカギ、アボカド、シナモン、シマスズメノエ、ショウベンノキ、パキスタキス、バルバドスザクラ、バンジロウ、フカノキ、ホルトノキ、インドソケイ属植物、カンキツ属植物、クチナシ属植物、シジギウム属植物	雌成虫は体長3mm内外、丸みを帯びた三角形、へん平、無翅、淡黄緑色～淡褐色。体下に白色綿状の分泌物で卵のうを形成する。成虫は主に葉の裏面に固着してほとんど移動することなく生活する。年1～2回発生するものと思われる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	すす病の誘発及び分泌物により、果実の品質低下を起こす。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物植物に該当せず、非検疫有害動物植物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動物植物

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生の系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
60	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Pseudaonidia trilobitiformis</i>		日本、タンザニア、レユニオン、グレナダ、ジャマイカ、セントビンセント、ドミニカ共和国、バルバドス、ブラジル、ベネズエラ、ニューカレドニア	カンキツ類、アコウ、アボカド、カカオ、カシューナッツ、ガジュマル、カナメモチ、ゲッキツ、ショウガ、チャ、マンゴウ、ヤマモモ、アンズリウム属植物、コーヒーマン属植物、ヤシ科植物、ラン科植物	雌成虫の介殻は長さ2~3mm、円~広楕円形、黄褐~灰褐色。雄幼虫の介殻は雌に比して遙かに小型。年に数回発生。卵マモモ、アンズリウム属植物、コーヒーマン属植物、ヤシ科植物、ラン科植物	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉面や果実に寄生し、美観を損なうが多発することはまれ。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 17 23 34 43 60	非検疫有害動物
61	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Pseudaulacaspis cockerelli</i>	アオキシロカイガラムシ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、南アジア、イタリア、英国、フランス、ロシア、エジプト、アフリカ(インド洋沿岸)、アメリカ合衆国、グアテマラ、米領西インド諸島、オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニア、ミクロネシア、メラネシア	広食性	成虫の体長は2~4mm。室内での発生は不規則である。年2回発生で、成虫で越冬する。第1世代幼虫は5月上~下旬に発生。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉、枝、果実等に寄生して生育阻害、品質低下を引き起こす。孵化幼虫は葉で吸汁加害し、綿状物質を分泌するようになる。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 15 17 23 34 43 60	非検疫有害動物
62	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Pseudaulacaspis pentagona</i>	クワシロカイガラムシ	世界各地(日本を含む)	広食性	雌成虫の介殻は長さ2~2.5mm、白色、ほぼ円形。雄幼虫の介殻は雪白色、小形で細く背面に3本の弱い隆起線がありもろい。年2回発生。成虫態で越冬。孵化幼虫は短時間のうちに寄主に定着する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	枝、幹、時に果実に寄生する。多発すると枝、幹の表面を介殻がおおい尽くすこともあり、生育を阻害し、激しいときは枯死させることもある。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 17 23 34 43 60	非検疫有害動物
42	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナカイガラムシ科	<i>Pseudococcus cryptus</i>	ミカンヒメコナカイガラムシ	日本、中国、インド、イスラエル、フィリピン、スリランカ、アメリカ合衆国、パラグアイ	カンキツ類、ココヤシ、ヤツデ	雌成虫は体長2.5~3mmで背面は白色粉状の口吻物質で被われ、体周縁全体に口吻物質からなるふさ状の突起を具える。雄は蛹を経て有翅成虫となる。越冬態は様々であるが、主として幼虫態で行われる。冬季も休眠しない。年間3~4世代。時に温室内で多発することがある。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成・幼虫が吸汁。多発時には寄主植物の生育が止まり、さらに激しいときは枯死枝を生じる。また、排泄物によりすす病が誘発される。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動物
34	有害動物	節足動物	カメムシ目	カタカイガラムシ科	<i>Pulvinaria psidii</i>	ミドリワタカイガラムシ	日本、中国、台湾、東南アジア、南アジア、アルジェリア、アンゴラ、ウガンダ、エジプト、エリトリア、ガーナ、カーボベルデ、ケニア、コートジボワール、コンゴ民主共和国、ジンバブエ、スーダン、セーシェル、タンザニア、チュニジア、ナイジェリア、マダガスカル、マラウイ、南アフリカ、モーリシャス、モザンビーク、カナリア諸島、セントヘレナ、レユニオン、アメリカ合衆国、バミューダ諸島、コスタリカ、メキシコ、西インド諸島、ブラジル、ベネズエラ、オーストラリア、パプアニューギニア、ハワイ、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア	ココヤシ、セイヨウキョウチクトウ、チュウインガムノキ、トベラ、マンゴウ、レイン、 <i>Cajanus cajan</i> 、 <i>Pouteria sapota</i> 、アンズリウム属植物、イチジク属植物、カンキツ属植物、ギョリュウ属植物、コーヒーマン属植物、シジギウム属植物、ソケイ属植物、ツバキ属植物、ニシキギ属植物、ハンジロウ属植物、マカダミア属植物、モチノキ属植物、モモタマナ属植物、ワニナシ属植物	雌成虫は体長3.5~4.5mm、楕円形、ヘン平~やや隆起、緑黄~緑黄褐色で光沢がある。成熟すると体後方に体長と同長さ~やや短い卵のうを形成され虫体は上方に反り返る。雄は知られていない。孵化幼虫は歩行により短距離移動する。単為生殖により繁殖する。海外では年2~3世代繰り返すとの記録がある。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	排泄物によりすす病を誘発し、葉の早期落葉、果実の品質低下を起こす。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 23 34 43 60	非検疫有害動物
82	有害動物	節足動物	チョウ目	ツトガ科	<i>Pyrausta niopealis</i>	ベニフキノメイガ	アジア(日本を含む)、アフリカ、南米、オーストラリア	シソ科植物(ハーブ類)	終齢幼虫の体長は15mm程度。年3~4回の発生と推定され、幼虫が枯れた葉や枝を綴ってその中で越冬する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫はシソ科(シソ、エゴマ類)の葉の一部を折り曲げ、糸で綴り合わせて摂食する。	登録農薬がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	1 7 16 23 43 60	非検疫有害動物
25	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Rhopalosiphum maidis</i>	トウモロコシアブラムシ	[アジア]日本、インド、インドネシア、カンボジア、北朝鮮、シンガポール、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、ネパール、パキスタン、フィリピン、プータン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス [中東]イエメン、イスラエル、イラク、イラン、サウジアラビア、シリア、トルコ、ヨルダン、レバノン [欧州]イタリア、英国、オーストラリア、オランダ、キプロス、旧ユーゴスラビア、ギリシャ、クロアチア、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、デンマーク、ドイツ、ブルガリア、旧チェコスロバキア、フランス、ハンガリー、ノルウェー、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、ロシア [アフリカ]アルジェリア、アンゴラ、ウガンダ、エジプト、エチオピア、ガーナ、カメルーン、ガンビア、ギニア、ケニア、コンゴ共和国、ザンビア、シエラレオネ、ジンバブエ、スーダン、セネガル、ソマリア、タンザニア、チャド、トーゴ、ブルンジ、ボツワナ、マダガスカル、マラウイ、マリ、南アフリカ共和国、モザンビーク、モーリシャス、モーリタニア、モロッコ、ナイジェリア、ニジェール、リビア、ルワンダ、レユニオン [北米]アメリカ合衆国、カナダ [中南米]アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、エルサルバドル、ガイアナ、キューバ、グアテマラ、コロンビア、ジャマイカ、スリナム、セントクリストファー・ネイビス、セントビンセント、チリ、ドミニカ共和国、トリニダード・トバゴ、ニカラグア、パナマ、バミューダ、バルバドス、ハイチ、フェルトリコ、ブラジル、ベネズエラ、ペルー、ホンジュラス、メキシコ、 [大洋州]オーストラリア、北マリアナ諸島、クック、ソロモン、トンガ、ニューカレドニア、ニュージーランド、パプアニューギニア、フィジー、ワリス・フテナ諸島	ジャガイモ、ジュズダマ、ダイダイ、タバコ、ハバイヤ、マニアサ、イネ科	無翅胎生雌虫体長約2.5mm。有翅胎生雌虫体長約1.5mm。暖地では胎生雌虫でムギやイネ科植物に越冬するものが多い。30℃で50世代。産卵後単為生殖を行う。	ー	ア 日本未発生 永続伝搬: Millet red leaf virus 非永続伝搬: Papaya mosaic virus、 Pepper vein mottle virus、 Banana mosaic virus イ 日本既発生 Abaca mosaic virus (Sugarcane mosaic virus)、 Maize leaf fleck (Barley yellow dwarf virus)	無	トウモロコシに多く寄生する。トウモロコシには好んで寄生し、葉の両面葉、顔花の苞葉や穂を吸汁加害する。そのため生育が著しく阻害される。成・幼虫がイネ科牧草の葉裏に寄生することが多い。繁殖の著しいときには穂にも寄生するので種実の喪失が悪くなる。	登録農薬あり:イネ、コムギ、トウモロコシ、ジャガイモ等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生のウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合はリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)」とされる。(別添PRA報告書参照)	72 94 95 98 101 102	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)

No.	動/補	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
26	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Rhopalosiphum padi</i>	ムギクビレアブラムシ	[アジア]日本、インド、インドネシア、北朝鮮、大韓民国、台湾、中華人民共和国、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ブータン、ベトナム、マレーシア、モンゴル、ラオス [中東]イスラエル、イラク、イラン、サウジアラビア、シリア、トルコ、ヨルダン [欧州]アイスランド、アルバニア、イタリア、ウクライナ、英国、オーストリア、オランダ、旧チェコスロバキア、旧ユーゴスラビア、ギリシャ、クロアチア、スイス、スウェーデン、スペイン、スロバキア、セルビア、チェコ、デンマーク、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ペラルーシ、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、リトアニア、ルーマニア、ロシア [アフリカ]エジプト、エチオピア、カメルーン、ケニア、ジンバブエ、セントヘレナ、南チユニア、南アフリカ共和国、モロッコ、リビア [北米]アメリカ合衆国、カナダ [中南米]アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、コロンビア、チリ、プエルトリコ、フォークランド、ブラジル、ペルー、ボリビア、メキシコ、 [大洋州]オーストラリア、ニュージーランド	イネ、ウシコロシ、ウメ、エンバク、オオムギ、キビ、コムギ、ズミ、スモモ、トウモロコシ、ナシ、ハダカムギ、ヒエ、モモ、リンゴ、サクラン	無翅胎生雌虫体長約2.3mm。有翅胎生雌虫体長約2.0mm。卵態で越冬。生活環はおよそ1週間。本種は、春から晩夏にかけて単為生殖だけによってしばしば繁殖する。	—	ア 日本未発生 非永続伝搬：Cynovirus mottle virus, Wheat streak mosaic virus イ 日本既発生 Abaca mosaic virus (Sugarcane mosaic virus)、Onion yellow dwarf virus、Maize dwarf mosaic virus、Ryegrass mosaic virus、Potato virus Y、Barley yellow dwarf virus	無	モモ、サクラン類に一次寄生し、イネ科植物に二次寄生する。萎葉、種の吸汁害、排泄物(甘露)にすす病が発生する。リンゴなどの主寄主植物に寄生したときは葉の裏面を内側に巻縮する。はなはだしいときには一樹の葉がごとく巻縮した被害葉となることがある。	登録農業あり：イネ、コムギ、トウモロコシ、果樹類等のアブラムシ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する際のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合はリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)」とされる。(別途PRA報告書参照)	69 72 94 95 98 101 102	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
5	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Scirtothrips dorsalis</i>	チャノキイロアザミウマ	[アジア]日本、インド、インドネシア、スリランカ、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー [中東]イスラエル [欧州]英国 [アフリカ]コートジボアール [北米]アメリカ合衆国 [中南米]スリナム、セントルシア、セントビンセント、ジャマイカ、トリニダードトバコ、バルバドス、プエルトリコ、ベネズエラ [大洋州]オーストラリア、ソロモン、パプアニューギニア	サクラン類、ナシ類、バラ類、ペゴニア類、アイリス、アケビ、アザレア、アジサイ、アヤメ、アンズ、イヌノキ、イチイ、イチジク、イチハツ、イヌツゲ、イヌマキ、ウバメガシ、ウメ、エノキ、オランダイチゴ、カキ、カナメモチ、カンキツ、キウイ、キク、キヤラボク、キンモクセイ、クチナンシ、クリ、サザンカ、サツキ、シキミ、シャガ、シャクナゲ、シャリンバイ、タラノキ、ダリア、チャリモヤ、チャ、ツゲ、ツツジ、ツバキ、トベラ、トルコギキョウ、ナンキンハゼ、ネクターリン、ニホンスモモ、ハマヒサカキ、ヒイラギ、ヒイラギモクセイ、ヒサカキ、ヒラカンサ、フドウ、ホオズキ、マンゴー、ミツバアケビ、モクセイ、モッコク、モモ、ヤマモモ、ヤブツバキ、ヨーロッパスモモ、ラッカセイ	雌成虫体長約0.9mm。雄成虫体長約0.8mm。年間5～8世代。越冬は成虫で行うが、暖地で餌が得られる場合は幼虫でも可能。雌は単為生殖できる。	—	ア 日本未発生 伝搬様式不明：Peanut chlorotic fan-spot virus, Peanut yellow spot virus, peanut bud necrosis virus (=Groundnut bud necrosis virus) イ 日本既発生 Tobacco streak virus	無	多発すると株が枯死して収穫皆無となるが、防除すれば実害はない。カンキツでは果皮が食害されて灰白色や褐色の大きな傷を作るので商品価値を低下させる。	登録農業あり：チャ、ナシ、モモ、キウイ、バラ等のチャノキイロアザミウマ、イネ、花き類等のアザミウマ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する際のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合はリスクは無視できると考えられる。以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)」とされる。(別途PRA報告書参照)	72 88 94 95 99 101 102 104	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
27	有害動物	節足動物	カメムシ目	アブラムシ科	<i>Semiaphis heraclei</i>	ニンジンアブラムシ	東アジア(日本を含む)、インド、インドネシア、パキスタン、ロシア、ハワイ	コリアンダー、シシウド、セロリ、ニンジン、ハスカップ、ハナウド、ミツバ	無翅虫は小形、主として淡緑色～黄緑色。おそらく寄主転換をする。生活史では不明な点も多い。	—	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	芯葉に寄生する。伸張を阻害する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	19 23 34 43 60	非検疫有害動物
74	有害動物	節足動物	チョウ目	アゲハチョウ科	<i>Sericanus montela</i>	ホソオチョウ	日本、朝鮮半島、中国、ロシア(沿海州)	ウマノズクサ、マルバウマノズクサ	日本では年2回発生。4月下旬に第1化が発生し、6～8月に第2化が発生。ウマノズクサが生える河川敷等に生息し飛翔は緩やか。季節的変異が認められ、夏型は春型に比べて大型になり、黒色部が発達する。いくつかの亜種が存在する。	—	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫が主に葉を摂食する。ただし、ウマノズクサ属を摂食するとの報告はあるが、農業への直接的被害は知られていない。	登録農業はない。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	33 35 43 50	非検疫有害動物
67	有害動物	節足動物	コウチュウ目	オサゾウムシ科	<i>Sipalinus gigas</i>	オオゾウムシ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、インド、スリランカ、ロシア、オーストラリア、ソロモン諸島	インドゴムノキ、エソマツ、カンジュ、コウヨウザン、スギ、ヒノキ、クリ属植物、コナラ属植物(カシ属植物)、サクラン属植物、シジギウム属植物、シダレイトスギ属植物、ツルサライチ属植物、ナツツジ属植物、ハプロファラグラマ属植物、ブナ属植物、マツ属植物、モミ属植物、ワサビノキ属植物	成虫は体長12～25 mm。伐倒丸太、伐ウザン、スギ、ヒノキ、クリ属植物、コナラ属植物(カシ属植物)、サクラン属植物、シジギウム属植物、シダレイトスギ属植物、ツルサライチ属植物、ナツツジ属植物、ハプロファラグラマ属植物、ブナ属植物、マツ属植物、モミ属植物、ワサビノキ属植物	—	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	衰弱木や伐根のほかに、湿潤な条件下にある伐倒丸太に産卵することが知られている。幼虫は主に辺材部を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	23 15 34 43 45	非検疫有害動物
72	有害動物	節足動物	ダニ目	ヒメハダニ科	<i>Tenuipalpus pacificus</i>	ランヒメハダニ	日本、台湾、東南アジア、欧州、アメリカ合衆国、中南米、オーストラリア、ハワイ	Cuban pink turmpet tree(ノウゼンカズラ科)、ラン科植物、シダ植物	雌の体長は340μ m内外、雄の体長は300μ m内外。産卵から成虫になるには約2ヶ月かかる。	—	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 10 34 43 60	非検疫有害動物
6	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Thrips alliorum</i>	ネギクビレアザミウマ	東アジア(日本を含む)、イラン、ハワイ	ネギ、タマネギ、ニンニク	雌成虫：体長1.6～1.8mm。体色は一律に褐色～暗褐色。脚は暗褐色。前脚腿節は黄褐色。付節は黄色。前翅はわずかに褐色を帯びる。雄成虫：短翅型。体長1.1～1.4mm。体色は雌と同様。両性生殖をおこなう。	—	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	ネギ類だけに寄生する狭食性。非検疫対象病害虫である <i>Thrips tabaci</i> ネギアザミウマに比べ発生頻度、密度は低い。加害状態はネギアザミウマと大差はない。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	23 27 34 43 59 60	非検疫有害動物
7	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Thrips hawaiiensis</i>	ハナアザミウマ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、南アジア、英国、スペイン、フランス、アンゴラ、ウガンダ、シエラレオネ、ナイジェリア、モザンビーク、アメリカ合衆国、ジャマイカ、メキシコ、オーストラリア、太平洋諸島	広食性	雌成虫の体長は、約1.1～1.6mm。色彩変異が大きく、頭部及び胸部は黄色～橙褐色で、腹部は褐色、脚は黄色～黄褐色。♂成虫：体長0.9～1.1mm、一律に黄色(♂)	—	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	様々な植物の主に花に寄生するが、花粉媒介昆虫としても報告もされている。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 12 23 26 32 34 37 43 49	非検疫有害動物

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
8	有害動物	節足動物	アザミウマ目	アザミウマ科	<i>Thrips palmi</i>	ミナミキイロアザミウマ	[アジア]日本、イラク、インド、インドネシア、北朝鮮、シンガポール、スリランカ、タイ、大韓民国、台湾、中華人民共和国、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー [中東]イラク [欧州]英国、オランダ [アフリカ]コートジボワール、スーダン、ナイジェリア、モーリシャス、レユニオン [北米]アメリカ合衆国 [中南米]アンティグア・バーブーダ、英領バージン諸島、オランダ領アンティル、ガイアナ、キューバ、グアドループ、グレナダ、コロンビア、ジャマイカ、スリナム、セントクリストファー・ネイビス、セントビンセント、セントルシア、ドミニカ、ドミニカ共和国、トリニダード・トバゴ、ハイチ、バハマ、バルバドス、フェルトリコ、ブラジル、フランス領ギアナ、ベネズエラ、マルティニーク、メキシコ [大洋州]アメリカ領サモア、オーストラリア、グアム、フランス領ポリネシア	ウリ類、アサガオ、アズキ、イチジク、イネ、インゲンマメ、エンドウ、オクラ、カーネーション、ガーベラ、キク、コスモス、ササゲ、サツマイモ、シクラメン、シソ、ジャガイモ、セキチク、ソラマメ、ダイズ、ダリア、トウガラシ、ナス、ナデシコ、ハイビスカス、ヒマワリ、ピーマン、フダンソウ、ブドウ、フヨウ、ホウレンソウ、ホオズキ、マンゴー、ムクゲ、イネ科牧草、マメ科牧草	雌成虫体長約1.3mm。雄成虫体長約1.1mm。 年間発生回数は野外で10世代前後、施設をあわせると20世代前後を繰り返す。 野外における越冬は沖縄以外ではほぼ不可能。	—	ア 日本未発生 伝搬様式不明: peanut bud necrosis virus (=Groundnut bud necrosis virus), Calla lily chlorotic spot virus イ 日本既発生 Tomato spotted wilt virus	無	幼苗では芯葉の展開が不揃いになり新葉の伸長不良や停止あるいは変形葉を生じて枯死することもある。	登録農業あり:ナス、ピーマン、キュウリ、スイカ、メロン、ホウレンソウ等のミナミキイロアザミウマ、イネ、花き類等のアザミウマ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。 しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。 以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 94 95 99 101 102 104	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
88	有害動物	節足動物	チョウ目	ヤガ科	<i>Thysanoplusia intermixta</i>	キクキンウバ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、インド、ネパール	カンキツ類、イラクサ、オランダイチゴ、シロ、キク科植物、セリ科植物、マメ科植物	成虫は前翅長16-18mm。前翅は紫色を帯びた褐色、中央に金色の大きな三角紋。老熟幼虫は体長40mm内外、胴部は黄色の混じった緑色で、小黑斑が多数あり、細い淡黄色の波状線が走る。頭部は小さく、体は前方細く後方太い。蛹は初め淡緑色、のちに黒褐色で薄い菌の中にある。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫は夜間に葉を摂食し、老熟幼虫は葉柄のみを残して蚕食する。年3-4回発生すると推定されるが大発生はない。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	23 34 43 60	非検疫有害動物
47	有害動物	節足動物	カメムシ目	コナジラミ科	<i>Trialeurodes vaporariorum</i>	オンシツコナジラミ	[アジア]日本、インド、大韓民国、中華人民共和国、シンガポール、スリランカ [中東]イスラエル、イラン、トルコ [欧州]アルバニア、イタリア、ウズベキスタン、英国、エストニア、オーストリア、オランダ、ギリシャ、クロアチア、スイス、スウェーデン、スペイン、スロベニア、セルビア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポルトガル、ポルトガル、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国、マルタ、モンテネグロ、ラトビア、ルーマニア、ロシア [アフリカ]ベネズエラ、グアドループ [北米]アメリカ合衆国、カナダ、バミューダ [中南米]アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、コロンビア、チリ、ブラジル、ペルー、エルサルバドル、グアテマラ、コスタリカ、パナマ、ホンジュラス、メキシコ、ドミニカ共和国、バルバドス、閩領西インド諸島、グアドループ、フェルトリコ、マルティニーク島 [大洋州]オーストラリア、ニュージーランド	バラ類、ベゴニア類、アザレア、アジサイ、アズキ、アスター、インゲンマメ、ウド、エンドウ、オクラ、オランダイチゴ、カーネーション、カブ、ガーベラ、カボチャ、カラ、カリフラワー、キク、キャベツ、キュウリ、キンギョソウ、ゴボウ、ササゲ、サツキ、サツマイモ、サトイモ、サルビア、シソ、ジャガイモ、シャクナゲ、シュコンカスミソウ、シユンギク、シロウリ、スイカ、ストック、セキチク、セロリ、ソラマメ、ダイコン、ダイズ、タバコ、ダリア、チャ、ツツジ、トウガラシ、トマト、トルコギキョウ、ナガイモ、ナス、ナデシコ、ニンジン、ハイビスカス、ハクサイ、ハマナス、ヒマワリ、ピーマン、ヒヤクニチソウ、フキ、フクシャ、ペラルゴニウム、ポインセチア、ホオズキ、マクワウリ、ヤマノイモ、ミツバ、ムクゲ、メロン、ランタナ、レタス	卵は長さ0.25mmで黄白色～紫灰色、葉裏に円型若しくは三日月状に産み付けられる。幼虫は淡緑～褐色、円形。幼虫加害部には白色の口吻状物質が付着する。初齢幼虫は移動可能だが、2～4齢幼虫は固着生活を送る。成虫は体長1.5mmで白色、翅は黄色で口吻状物質に覆われる。20℃では約1か月で1世代を経過する。休眠性はなく、加温の施設内では周年発生する。野外では卵越冬が主体。	—	ア 日本未発生 半永続伝搬: Strawberry pallidosis virus, Strawberry pallidosis associated virus 伝搬様式不明: Tomato torrado virus イ 日本既発生 Beet pseudo-yellows virus, Tomato infectious chlorosis virus, Tomato chlorosis virus	無	キュウリ、ナス、カボチャ、トマトなどの果菜類、ポインセチア、ランタナ、ペラルゴニウム、フクシャ、ガーベラ、サルビアなどの花卉類、キク科の雑草など非常に多くの植物に寄生増殖する。インゲンマメは比較的好まれる寄主らしく、露地でもしばしば寄生を受けてすす病の発生や生育の抑制が見られる。	登録農業あり:野菜類、豆類、花き類、観葉植物等のコナジラミ類	本種は日本既発生で、公的防除の対象ではなく、その計画もないため検疫有害動物の要件を満たしていない。 しかし、本種は日本未発生ウイルスを媒介することが報告されているため、栽培の用に供する植物に付着する場合のベクターとしての病害虫リスクは無視できない可能性が高い。一方、消費用植物に付着する場合のリスクは無視できると考えられる。 以上から、ベクターとしての病害虫リスクが明らかでないため、本種は「非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)とされる。(別途PRA報告書参照)	72 74 79 83 89 90 91 92 94 95 99 102 103	非検疫有害動物(栽培の用に供する植物に付着するものを除く)
50	有害動物	節足動物	カメムシ目	マルカイガラムシ科	<i>Unaspis yanonensis</i>	ヤノネカイガラムシ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、イタリア、フランス、オーストラリア、フィジー	カンキツ属植物	雌成虫の介殻は長さ2.5～3.5mm、ゴマ粒型、紫褐色～灰紫褐色。雄の介殻は繡状、小形で細く白色でもろい。年に2～3回発生。通常、雌は成虫で越冬。卵は雌の介殻下に産下される。羽化幼虫は介殻から脱出後、短時間のうちに寄主に定着し、雌は終生移動することなく2齢幼虫を経て成虫となり、雄は蛹を経て有翅成虫となる。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫、雌成虫が枝、幹、葉面、果実等の地上部のすべてに寄生し、吸汁する。しばしば大繁殖する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 17 23 34 43 60	非検疫有害動物
96	有害動物	その他無脊椎動物	柄眼目(現・有肺目)	オナジマイマイ科	<i>Acusta despecta</i>	ウスカワマイマイ	日本、朝鮮半島、台湾、フィリピン	カンキツ類、アカクローバ、ウド、オーチャードグラス、シソ、シロクローバ、ヤマノイモ、アカザ科植物、アブラナ科植物、ウリ科植物、キク科植物、セリ科植物、ナス科植物、ユリ科植物、ラン科植物	雌雄同体。成体の貝殻の高さ約20mm、直径約20～25mm。卵は球形で直径2mm、土中に産卵する。1雌の産卵能力は100卵内外である。成体で越冬する春季産卵型と幼体で越冬する秋季産卵型に大別出来き、多くは年1回の発生であるが、年や場所によっては2世代を経過することがある。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	幼虫は主として腐食を食べて成長するが、やがて植物を摂食するようになる。葉菜やタバコには葉に多数の不整形の穴をあける。また、タバコでは茎葉に付着した粘液や排泄物が葉の腐敗の原因となる。カンキツの幼果期の食痕は線状で、成熟期には穴をあける。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	34 39 42 43 60	非検疫有害動物
97	有害動物	その他無脊椎動物	柄眼目(現・有肺目)	オナジマイマイ科	<i>Bradybaena similis</i>	オナジマイマイ	世界各地(日本を含む)	カンキツ類、シロクローバ、コーヒー、アブラナ科野菜、イネ科植物	成体の殻高11.5～13.5mm内外、殻径17.5～18.5mm内外。薄く半透明で黄褐色。殻口は広く円形。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	新葉や幼果を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	4 7 34 40 42 43 60	非検疫有害動物
98	有害動物	その他無脊椎動物	柄眼目(現・有肺目)	コウラナメクジ科	<i>Deroceras laeve</i>	ノハラナメクジ	日本、欧州	カンキツ類、イチゴ、モモ、スモモ、アウトウ、カキ、リンゴ、キンギョソウ、シクラメン、シロクローバ、プリムラ、サルビア、スミレ、ベチュニア、リンドウ、アブラナ科植物、イネ科植物、キク科植物、ラン科植物	成体の体長25～30mm。越冬した成体は、3～4月に産卵する。孵化した幼虫は夏に成体となり秋に産卵する。年2回の発生。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	成・幼体が各種の野菜や花卉の葉に穴をあけて摂食する。また、鉢底から侵入して根を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	34 40 42 43 60	非検疫有害動物
93	有害動物	その他無脊椎動物	収眼目	アシヒダナメクジ科	<i>Laevicaulis alte</i>	アシヒダナメクジ	日本、中国、台湾、南アジア、インド洋の島々、アフリカ、オーストラリア、サモア、ハワイ	野菜等を食害する報告がある	暗褐色で体長7-8cm。殻、甲羅はない。背面にベージュ色の帯がある。足の裏に多くの横ひだがある	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	米国では既に定着している侵入病害虫で、農業生産や環境への影響が危惧されている。 沖縄産のドラセナ類を通じて愛知県内の植物公園の養生温室へ侵入しオリーブランに捕食被害が出た報告がある。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	29 34 36 43 60	非検疫有害動物

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生の系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
94	有害動物	その他無脊椎動物	中腹足目(現・吸殻目)	タニシモドキ科	<i>Pomacea canaliculata</i>	スクミリンゴガイ	東アジア(日本を含む)、東南アジア、パプアニューギニア、アメリカ合衆国、ドミニカ共和国、アルゼンチン、ウルグアイ、スリナム、パラグアイ、ブラジル、ボリビア、グアム、ハワイ	イグサ、イネ、サトイモ、マコモ、ミズイモ、レンコン、アカウキサス属植物	大型の巻貝で、成長すると殻高8cmにもなる。卵は外径4~6mmで紅色、卵塊として産卵される。夜間、水辺植物の茎葉、杭、コンクリート壁面等にのぼり400粒ほどの卵を産付する。1雌の総産卵数は2,000~8,000粒が観察されている。えらと肺の両方で呼吸する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	初発芽時の幼植物を好んで摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 34 35 42 43 60	非検疫有害動物
95	有害動物	その他無脊椎動物	柄眼目(現・有肺目)	オカモノアラガイ科	<i>Succinea lauta</i>	オカモノアラガイ	日本、サハリン	広食性	成体の貝殻の高さ25mm、直径15mm内。殻は半透明、黄~褐色を呈する。夏季に産卵する。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	多発時には野菜類で実害が生ずることがある。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	34 42 43 60	非検疫有害動物
99	有害動物	その他無脊椎動物	柄眼目(現・有肺目)	コハクガイ科	<i>Zonitoides arboreus</i>	コハクガイ	日本、北米	ラン科植物	殻は小さく、殻高2.5mm、殻径5mm。胎殻は1.3~1.4mm。	寄主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	日本未発生病害虫のベクターとなる旨の報告はない	無	葉等を摂食する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	4 34 43 60	非検疫有害動物
102	有害植物	真菌及び粘菌			<i>Cercospora kikuchii</i>	ダイズ紫斑病菌	東アジア(日本を含む)、インド、イラン、スリランカ、タイ、ネパール、バングラディッシュ、マレーシア、クアチア、フランス、ロシア、ウガンダ、エチオピア、ガーナ、ガボン、カメルーン、ザンビア、ジンバブエ、トーゴ、ナイジェリア、ブルキナファソ、南アフリカ、モザンビーク、リベリア、北米、キューバ、ジャマイカ、トリニダードトバゴ、プエルトリコ、アルゼンチン、コロンビア、ボリビア、ブラジル、オーストラリア、パプアニューギニア、フィジー	エビスグサ、オキナサガオ、オナモミ、クラスタマメ、ダイズ、インゲン属植物、ササゲ属植物	不完全菌類に属する。分生子は無色で細長くやや湾曲し、大きさは70~165×4~5µmで、隔壁10~32個存在する。分生子形成の適温は20~25℃で、生育適温はこれよりやや高い。越冬は種子で菌糸の形で行う。種皮上に形成された分生子及び前年の植物残渣が第1次伝染源となる。	宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	無	種子及び葉に発生し、種子では表面に紫色の斑点を生ずる。罹病種子を播種すると、子葉に円形又は不規則の褐色ないし紫褐色の斑点を生じて早期に落葉する。成葉では、はじめ紫紅色の斑点を生じ、のちに葉脈間を境に多角形になる。	農業登録がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で宿主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 19 41 43	非検疫有害動物	
103	有害植物	真菌及び粘菌			<i>Colletotrichum atramentarium</i>		世界各地(日本を含む)	トウガラシ属植物、ナス属植物	不完全菌類に属する。多数の分生子層を生じ、良く発達した剛毛を伴生する。分生子の大きさは16~24×4~5µmである。菌の生育適温は26~28℃。被害茎で土中で越冬し、伝染源となる。また、塊茎や根から伝播する。とくに生育の弱った茎等に寄生し、菌密度を高める。	宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	無	根に発生する。根や地際部は褐色の病斑を形成し、その表面に多数の小黑点(分生子層)を生ずる。また、その周りの細根は淡褐色に腐敗して脱落する。葉や茎は黄化し、落葉、生育の遅れや着果が少なくなる。	登録農業はない。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で宿主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	19 21 41 43	非検疫有害動物	
104	有害植物	真菌及び粘菌			<i>Fusarium oxysporum f. sp. narcissi</i>	スイセン乾腐病菌	日本、英国、ドイツ、南アフリカ、北米、オーストラリア	スイセン属植物	不完全菌類に属する。分生子には2型があり、小型分生子は無色、単胞、楕円形~卵円形、大きさ平均8.5×3µm、大型分生子は無色、2~4胞、やや曲がった三日月形、平均27×4µm。厚壁胞子は無色~淡褐色、円形~楕円形で膜が厚く直径6~12µm。本分化型はスイセンのみを侵す。罹病植物残渣とともに厚壁胞子の形で土壌中に長期間残存して伝染源となるほか、植物の生育期間には病患部に生じた分生子が飛散してまん延する。また、保菌鱗茎が伝染源となって伝播することも多い。生育期間における土壌の過湿や過乾は本病原菌の感染を促す。	宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	無	主に根及び鱗茎に発生する。初め地際の葉鞘部が褐変し、しだいに萎凋枯死する。病株では根が黒褐色に腐敗し、鱗茎も茎盤部から内部鱗片に向かって褐変腐敗する。保菌鱗茎は貯蔵中に基盤部から発病し、内部鱗片全体が黒褐色に腐敗してミイラ状に乾固する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で宿主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 19 41 43 61	非検疫有害動物	
105	有害植物	真菌及び粘菌			<i>Fusarium oxysporum f. sp. tulipae</i>	チューリップ球根腐敗病菌	日本、オランダ、アメリカ合衆国	チューリップ	不完全菌類に属する。分生子には2型があり、小型分生子は無色、長楕円形~卵円形、単胞、大きさ平均8.5×3µm、大型分生子は無色、新月形、2~8胞、平均29.2×3.8µm。厚壁胞子は無色~淡褐色、円形~楕円形で細胞壁が厚く、直径6~12µm。生育温度は適温25~30℃、最高35℃、最低5℃である。施設での切花栽培では地温が20℃前後になると発生が多くなる。罹病植物残渣とともに厚壁胞子の形で土壌中に長期間生じて伝染源となるほか、保菌鱗茎の病斑組織内で菌糸の状態であるいは病斑上での分生子の形で越冬して伝染する。主に根や鱗茎上に生じた傷害部から侵入感染するが、表皮細胞の縫合部や気孔等からも侵入する。	宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	無	根及び鱗茎に発生する。開花期頃から茎葉全身が退色し、地際部から次第に紫色に変わって萎凋枯死する。鱗茎では柔組織が崩壊腐敗する等、発病程度は様々である。鱗茎茎盤部が褐変した鱗茎は貯蔵期間にも腐敗が進み、後に萎縮して乾固する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で宿主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	19 41 43	非検疫有害動物	
106	有害植物	真菌及び粘菌			<i>Stagonospora curtisii</i>	アマリス赤斑病菌	日本、インド、イラク、ポーランド	ヒツアストラム属植物、スノーフレーク属植物、ヒガンバナ属植物、スイセン属植物、タマダレ属植物	不完全菌類に属する。分生子は円筒形、真直~やや曲がり、無色の淡黄色、1~4隔壁をもち、大きさ20~25×3.5~6µm。菌叢の生育適温は15℃、最高30℃、最低5℃である。罹病植物残とともに柄子殻や菌糸の形で越冬し、降雨時や灌水時の水しぶきによって分生子が飛散して伝染する。また、病原菌が感染している鱗茎が伝染源となることも多い。	宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	無	葉身、花茎、苞及び鱗茎に発生する。葉身では、同心円状の輪紋を形成することが多い。病斑上には暗褐色の菌叢を生じる。花茎では、やや盛り上がった赤褐色葉斑となり、病斑に亀裂を生じる。鱗茎では、赤褐色、円形~楕円形の病斑を生じる。	登録農業はない。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で宿主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 19 41 43	非検疫有害動物	
100	有害植物	細菌			<i>Pectobacterium carotovorum subsp. Carotovorum</i>		東アジア(日本を含む)、東南アジア、バングラディッシュ、インド、中東、欧州、ジンバブエ、マラウイ、南アフリカ、モーリシャス、アフリカ(地中海沿岸)、アフリカ(中部)、北米、キューバ、コスタリカ、セントクリストファー・ネイビス、パナマ、プエルトリコ、ホンジュラス、メキシコ、マルティニーク島、アルゼンチン、コロンビア、チリ、ブラジル、ベネズエラ、ペルー、ボリビア、オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニア、米領サモア	多犯性	グラム陰性桿菌。大きさは0.5~1.0×1.0~3.0µm。病原菌は土壌中に生存し、傷口などから侵入し、軟化、腐敗を生じさせる。汚染された水苔、軽石、パークなどの植え込み材料、鉢、ベンチなどから伝染する。	宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	無	バルブ、茎葉、根に発生する。初め新葉が生気を失ってしおれる。しおれは急速に株全体に及び、数日以内にバルブ内部が軟腐する。ジャガイモ塊茎では表皮を残したまま内部が軟化し、表面に多量の細菌粘液を露出する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で宿主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 13 19 39	非検疫有害動物	
101	有害植物	細菌			<i>Pectobacterium cypripedii</i>		日本、台湾、南アフリカ、米国、オーストラリア	ラン科植物	グラム陰性桿菌。大きさは0.5~0.7µm×0.7~1.4µm。植え込み資材、鉢、ベンチが第一次感染源。管理作業、病葉との接触などにより伝染する。	宿主植物の被害に差がある系統等が存在するとの報告はない	無	バルブと葉に発生する。頂部や展開してまもない新葉に水浸状の斑点を生じる。やがて斑点は急速に拡大し、褐色から黒褐色、軟腐状に腐敗する。	登録農業がある。	日本に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で宿主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動物に該当せず、非検疫有害動物と位置づけられる。	7 13 19 39	非検疫有害動物	

No.	動/植	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生系の系統・バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的防除の有無	症状	防除法	結論	文献	備考
-----	-----	----	---	---	----	----	----	------	-------	----------------	-------------	---------	----	-----	----	----	----

参考文献リスト

1 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室(2012) あいち病害虫情報 病害虫図鑑～生態と防除～ (http://www.pref.aichi.jp/byogaichu/zukan.html)

2 Aoki, S. & Kurosu, U. (1992) Record of Phloeomyzus passerini (Aphididae, Phloeomyzinae) from Japan. *Rostroia* 42: 15-16.

3 青山潤三(1998) 中国のチョウ 東海大学出版会 392pp.

4 東正雄(1995) 原色日本産産貝類図鑑 増補改訂版 保育社 343pp.

5 Blackman, R.L. & Eastop, V.F. (2000) *Aphids on the World's Crops*. John Wiley & Sons, Ltd. 466pp.

6 Blackman, R.L. & Eastop, V.F. (2006) *Aphids on the World's Herbaceous Plants and Shrubs*. John Wiley & Sons, Ltd. 1439pp.

7 CAB International(2013) Crop Protection Compendium. CAB (http://www.cabi.org/cpc/)

8 Davis, C.J. (1969) Notes on the Grass Webworm, *Herpetogramma licarsalis* (Walker) (Lepidoptera:Pyraustidae), A New Pest of Turfgrass in Hawaii and its Enemies. *Proceedings, Hawaiian Entomological Society* 20:311-316

9 江原昭三 編(1993) 日本原色植物ダニ図鑑 全国農村教育協会 298pp.

10 江原昭三・大久保憲秀(1992) 日本国内における *Tenuipalpus pacificus*(ランヒメハダニ)の存在 植物防疫 46:245-248

11 江原昭三・後藤哲雄 編(2009) 原色植物ダニ検索図鑑 全国農村教育協会 349pp.

12 Goldarazena, A.(2011) First record of *Thrips hawaiiensis* (Morgan, 1913) (Thysanoptera: Thripidae), an Asian pest thrips in Spain. *EPPO Bulletin* 41:170-173

13 後藤正夫(1990) 植物細菌病理学概論. 養賢社 283pp.

14 平井一男ら(2011) 防除ハンドブック 豆類の病害虫. 全国農村教育協会 64pp.

15 北海道立総合研究機構林業試験場(2012) 森とみどりの図鑑 (http://www.fri.hro.or.jp/zukan/htm)

16 井上寛ら(1982) 日本産蛾類大図鑑<1>解説編 講談社 966pp.

17 河合省三(1980) 日本産原色カイガラムシ図鑑 全国農村教育協会 455pp.

18 木元新作・滝沢春雄(1994) 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説 東海大学出版会 539pp.

19 岸園平 編(1998) 日本植物病害大事典 全国農村教育協会 1276pp.

20 金城美枝子ら(1996) 沖縄県で発生が確認されたマンゴーのカイガラムシ類 九病虫会報 42:125-127

21 高知県農業振興部 こうち農業ネット (http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/)

22 工藤広悦、佐藤雅彦(2010) 利尻島のメイガ類 利尻研究29:43-51.

23 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室編(1999) 日本産昆虫目録データベース. 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. (http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html)

24 Lewis, T. (1997) *THRIPS AS CROP PESTS*. CAB INTERNATIONAL. 740pp.

25 Li ZhaoHui et al.(2008) Bionomics of the butterfly, *Hestina assimilis*. Chinese Bulletin of Entomology 45:754-757

26 Majid Mirab-balou et al (2011) Thrips (Insecta: Thysanoptera) of China. *Check List* 7:720-744.

27 Majid Mirab-balou et al (2012) A new record and description of a new species of the genus Thrips, with an updated key to species from Iran. *Journal of Insect Science* 12 Article 90

28 松本嘉幸(2008) アブラムシ入門図鑑 全国農村教育協会 239pp.

29 松岡敬二ら(2004) 豊橋総合動植物公園内で繁殖したアシヒダナメクジ (日本貝類学会平成15年度大会(豊橋)研究発表要旨). *Venus* 62:86-87

30 森本桂 監修(2007) 新訂原色昆虫大図鑑Ⅱ甲虫篇 北隆館 東京 526pp.

31 森津孫四郎(1983) 日本原色アブラムシ図鑑 全国農村教育協会 545pp.

32 Murai, T.(2001) Development and reproductive capacity of Thrips hawaiiensis (Morgan) (Thysanoptera: Thripidae) and its potential as a major pest. *Bull. Entomol. Res.* 91:193-198.

33 Nazari, Vazrick(2006) Tree of Life web project - *Sericinus montela* -. (http://tolweb.org/Sericinus_montela/65396#AboutThisPage)

34 日本応用動物昆虫学会 編(2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 日本応用動物昆虫学会 387pp.

35 日本生態学会 編(2002) 外来種ハンドブック. 地人書館 390pp.

36 西浩孝、松岡敬二(2009) 豊橋総合動植物公園内で見られる陸産貝類 豊橋市自然史博物館研報 19:25-28

37 西本周代ら(2006) 鹿児島県内の花きほ場で発生する主要アザミウマ類3種に対する各種薬剤の殺虫効果. 九病虫研究会報 52:49-53.

38 North American Plant Protection Organization's (NAPPO) Phytosanitary Alert System(2009) Regulatory Action for Pea Leaf Miner (*Liriomyza huidobrensis*) – United States. (http://www.pestalert.org/oprDetail.cfm?oprID=393&keyword=Liriomyza)

39 農文協 編(2005) 原色果樹病害虫百科第2版第1巻 農山漁村文化協会 667pp.

40 農文協 編(2005) 原色野菜病害虫百科第2版第4巻 農山漁村文化協会 474pp.

41 農業生物資源ジンバンク(2013) 日本植物病名データベース (http://www.genie.affrc.go.jp/databases-micro_pl_diseases.php)

42 農研機構(2012) 農研機構ホームページ (http://www.naro.affrc.go.jp/)

43 農林水産消費安全技術センター(2013) 農業登録情報提供システム (http://www.acis.famc.go.jp/searchF/vtlim001.html)

44 小川義雄ら(1989) 長崎県のダイズ畑におけるウワバ類の発生実態 九病虫研究会報 35:113-116

45 岡田充弘・中村克典(2008) オオゾウムシ *Sipalinus gigas* (Fabricius)のアカマツ製材面への加害. 日本森林学会誌 90:306-308.

46 Okajima, S.(2006) *THE INSECTS OF JAPAN Vol.2 The Suborder Tubulifera (Thysanoptera)*. Touka Shobo. 720pp.

47 Paul Waring, P., & Townsend, M. (2009) *Field Guide to the Moths of Great Britain and Ireland*. British Wildlife Publishing 444pp.

48 Pemberton, R.W. et al (2005) *Dulinius conchatus* Distant (Hemiptera: Tingidae), Considered and Rejected as a Potential Biological Control Agent of *Paederia foetida* L. (Rubiaceae), an Invasive Weed in Hawaii and Florida. *Proc. Hawaiian Entomol. Soc* 37:81-83

49 Reynaud, P. et al (2008) Thrips hawaiiensis (Morgan, 1913) (Thysanoptera: Thripidae), an Asian pest thrips now established in Europe. *EPPO Bulletin* 38:155-160

50 白水隆(2006) 日本産蛾類標準図鑑 学習研究社 336pp.

51 杉本俊一郎(2003) 埋立地に発生するアブラムシ類. 植防研報 39:29-40

52 Sugimoto, S. et al.(2003) Additional List of Aphids (Homoptera: Aphididae) Intercepted at Japanese Plant Quarantine, II. *Res. Bull. PlProt. Japan* 39:79-84

53 武田光能(2009) 葉菜類で問題となるハモグリバエ類の発生生態と防除対策 農研機構平成21年度農政課題解決研修 野菜の難防除病害虫に対する最新技術Aコース研修テキスト.

54 Tashiro, H.(1976) Biology of the Grass Webworm, *Herpetogramma licarsalis* (Lepidoptera:Pyraustidae) in Hawaii. *Entomological Society of America* 69:797-803

55 Todd M. Gilligan and Marc E. Epstein(2012) Tortricids of Agricultural Importance (http://ditools.org/id/leps/tortai/index.html)

56 徳丸晋(2010) ハモグリバエ類の生態と防除に関する研究の現状と課題. 植物防疫64:782-785

57 友国雅章 監修(1993) 日本原色カメムシ図鑑 全国農村教育協会 380pp.

58 辻田満広 棉の害虫ワタリンガの幼虫及び蛹の形態 西京大学術報告 農学 2:111-115.

59 梅谷敏二(1988) 農作物のアザミウマ 分類から防除まで. 全国農村教育協会 422pp.

60 梅谷敏二、岡田利承 編(2003) 日本農業害虫大事典. 全国農村教育協会 1203pp.

61 USDA(2013) Fungal Databases (http://nt.lars-grin.gov/fungaldatabases/)

62 蕭剛柔 編(1991) 中国森林昆虫 第2版. 中国林業出版社 1362pp.

63 徐公天、楊志華 編(2007) 中国園林害虫. 中国林業出版社 400pp.

64 矢田修 監修(2007) 新訂原色昆虫大図鑑Ⅰ 蝶・蛾篇. 北隆館 460pp.

65 山田量崇・行成正昭(2009) 徳島県におけるプラタナスグンバイとヘクソカズラグンバイの発生. 徳島県立博物館研究報告 19:51-54.

66 Alford D. V. (2007) *Pests of fruit crops : a color handbook* . Academic Press 461pp.

67 Alford D. V. (2012) *Pests of Ornamental Trees, Shrubs and Flowers, Second Edition: A Color Handbook* . Academic Press 480pp.

68 Bayer CropScience AG (2012) *Bayer Crop Science Global Internet Portal Crop Compendium* . (http://www.cropscience.bayer.com/en/Crop-Compendium/Pests-Diseases-Weeds.aspx)

69 Breithaupt J. (2010) *Hyperomyzus lactucae* (ID: 26070). *ECOPORT* . Record originally contributed by FAO (http://ecoport.org/)

70 Brunt AA, Crabtree K, Dallwitz MJ, Gibbs AJ, Watson L, Zurcher EJ (1996) *Plant viruses online: descriptions and lists from the VIDE database* . (http://sdb.im.ac.cn/viderefs.htm/)

71 CAB International (1993) *Distribution maps of plant pests* . map 264

72 CAB International (2013a) *Crop protection compendium* . CAB International (http://www.cabicompendium.org/cpc/home.asp)

73 CAB International (2013b) *Plantwise search* (http://www.plantwise.org/default.aspx?site=234&page=4408)

74 Celix A., Lopez-Sese A, Almarza N., Gomez-Guillamon ML., Rodriguez-Cerezo E. (1996) Characterization of cucurbit yellow stunting disorder virus, a Bemisia tabaci-transmitted Closterovirus. *Phytopathology* 86(12):1370-1376

75 Chan C. K. and A. R. Forbes (1991) *Aphid-transmitted viruses and their vectors of the world* . Research Branch, Agriculture Canada 216pp

76 Fortass M., Bos L. (1993) Broad bean mottle virus in Morocco; variability, interaction with food legume species, and seed transmission in faba bean, pea, and chickpea. *Netherlands Journal of Plant Pathology* 99.

77 Fraval A. (1997) *HYPPZ on line encyclopédie des ravageurs européens* . (http://www7.inra.fr/hyppz/pa.htmFraval)

78 Greber RS, Klose MJ, Teakle DS, Milne JR (1991) High incidence of tobacco streak virus in tobacco and its transmission by Microcephalothrips abdominalis and pollen from Ageratum houstonianum. *Plant Disease* 75(5):450-452

79 Hartono S, Natsuaki T, Sayama H, Atarashi H, Okuda S (2003) Yellowing disease of tomatoes caused by Tomato infectious chlorosis virus newly recognized in Japan. *Journal of General Plant Pathology* 69(1):61-64

80 John L. (2001) *Handbook of Vegetable Pests* . Academic Press 727pp.

81 Kersting U., Korkmaz S., Çinar A., Ertuaal B., Önelge N., and Garnsey S. M. (1996) Citrus Chlorotic Dwarf, a New Whitefly-Transmitted Disease in the Eastern Mediterranean Region of Turkey; *Thirteenth IOCV Conference*

82 Kirino N., Inoue K., Tanina K., Yamazaki Y., Ohki S. K. (2008) Turnip yellow mosaic virus isolated from Chinese cabbage in Japan. *Journal of General Plant Pathology* 174.

83 Ministry of Agriculture British Columbia Canada (2011) *Emerging Virus Diseases of Greenhouse Vegetable Crops* . (http://www.agf.gov.bc.ca/cropprot/emergingviruses.htm)

84 Nakao, S., Chikamori, C., Okajima, S., Narai, Y. and Murai, T.(2011) A new record of the tobacco thrips *Frankliniella fusca* (Hinds) (Tysanoptera:Thripidae) from Japan. *Appl. Entomol. Zool.* 46(2):131-134

85 Savaliya S.D., Butani P.G., Gedia M.V., Prasad T.V. (2008) Post-embryonic Observations on Striped Mealy Bug, *Ferrisia virgata* (Cockerell) – A Major Pest of Custard apple. *Annals of Plant Protection Sciences* 16(2) :389-392

86 Stobbs L. W., Cerkauskas R. F., Lowery T., VanDriel L. (1998) Occurrence of Turnip Yellow Mosaic Virus on Oriental Cruciferous Vegetables in Southern Ontario, Canada. *Plant disease* 82.

87 The Association of Applied Biologists (AAB) (2013) *Descriptions of Plant Viruses* (http://www.dpvweb.net/dpv/showdpv.php?dpvno=394)

88 The Texas State University System (2011) *Institute for the Study of Invasive Species - A Member of The Texas State University System* . (http://www.tsusinvasives.org/)

89 Tzanetakis, I.E., Halgren, A.B., Keller, K.E., Wintermantel, W.M., Martin, R.R. (2003) Two criniviruses are associated with the strawberry pallidosis disease. *Acta Horticulturae* 656

90 Tzanetakis I.E., Mackey I. C., Martin R. R. (2004) Strawberry necrotic shock virus : a new virus previously thought to be tobacco streak virus. *Acta Horticulturae* 656

91 Vacante (2010) *Citrus Mites - Identification, Bionomy and Control* . Wallingford, Oxfordshire, CABI 378pp

92 Verdin, E.; Gognalons, P.; Wipf-Scheibel, C.; Bornard, I.; Ridray, G.; Schoen, L.; Lecoq, H. (2009) First Report of Tomato torrado virus in Tomato Crops in France. *Plant disease* 93(12):1352-1353

93 Wintermantel, W.M. (2004) *Emergence of Greenhouse Whitefly (Trialeurodes vaporariorum) Transmitted Criniviruses as Threats to Vegetable and Fruit Production in North America* . APSnet Features. Online. doi:10.1094/APSnetFeature-2004-0604

94 梅谷敏二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 全国農村教育協会 1203pp.

95 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター(1989) 日本産昆虫総目録. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター編, 平嶋義宏監修 九州大学農学部昆虫学教室 (http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html)

96 近藤秀樹・前田学憲・野田瑞紀・鈴木信弘・玉田哲男(2009) ランエそ斑紋ウイルスのダニ伝搬様式. 分子系統および診断技術に関する研究. Proceedings of NIOC

97 高橋・福泉(1988) 日本未記録の数種のアブラムシの発見とその生態について 応用動物昆虫学会第32回講演要旨集 P.149.

98 谷口達雄(1995) アブラムシーおもしろ生態とかしい防ぎ方. 農山漁村文化協会 106pp.

99 日本応用動物昆虫学会(2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 日本応用動物昆虫学会 編集・発行 387pp.

100 日本植物病理学会植物ウイルス分類委員会 (2012) 日本に発生する植物ウイルス・ウイロイド (http://www.ppsj.org/pdf/mokuroku-viroid_2012.pdf)

No.	動/補	区分	目	科	学名	和名	分布	寄主植物	形態・生態	未発生の系統・ バイオタイプ	媒介し得る未発生病害虫	公的 防除 の有 無	症状	防除法	結論	文献	備考
101																	
102																	
103																	
104																	
105																	
106																	
107																	
108																	
109																	
110																	
111																	
112																	
113																	
114																	
115																	